

自分が入学するような喜びであった。その日、中学生制服姿のたのしい中学生。

昭和十八年、部落の若者が次から次へと入営徴召されていく姿、村を挙げての送別会、「死んで帰ってきます」と勇ましく出で立つ若者。真栗里東原、東田原の飛行場建設、汗水流してやっとまとめた畑の強制買上げ、飛行場建設作業への徴用。労働力のある者は全員水牛もつれて飛行場作業。自分のいも畑に石や土をトロッコで運んで埋立てをする様子を見て見守る姿。六〇の坂を越した年寄りの体で田に畑に食糧増産に励む毎日。西表徴用、平得の徴用夫人の川に流されて死亡した話。

昭和十九年、いよいよ戦争の激化、日本兵の移駐、野に山にあふれる兵隊、陣地構築、長男伊舎を組合長とし、自分は願人（にがいびと）として守り育てた桃里牧場へ入り込んだ兵隊、次々に減っていく牧場の牛馬。長男は水牛をつれて飛行場建設へ徴用、嫁もまた徴用、孫（小生）もまた生徒の動員作業へ。残る孫五歳・九歳・十二歳を励ましつづの野良仕事。畑はいよいよ埋められていく。合間をみての防空壕掘り。

十月十二日の初空襲、五歳の孫一人をつれて右往左往。空襲がずんで家族皆集って、夜、前の畑の木の下で食べた夕食のこと。十月十五日名歳の田小屋へ避難（二、三日で帰る）。いよいよ戦場となる八重山。長男の特別工兵隊召集。家族つれての避難訓練。子や孫にも荷物をもたせてアイクル坂道を越えて、嫡孫（小生）が学業を放棄して兵隊を志願するということをやっつとやめさせたこと。嫁と孫が白保工兵隊にいる長男伊舎の兵舎へ弁当をつくって食糧をも

死の道すれとする戦争の悲惨さ、戦争で尊い生命を失った人々に対して「もう決して戦争はいたしません」と誓いをすると同時に生きのびた私たちは戦争を憎み、人民の力を結集して戦争拒否の力をつくりあげ、人殺しをする兵隊募集を拒否する運動を展開すべきだと決意を新たにすることである。

## 五、皇国大日本青少年隊

竹富町字竹富 宮良長 完（十四歳）

竹富国民学校高等科第一学年の八月十五日太平洋戦争は終った。戦争のために義務教育の後半は、まともに授業を受けずに終戦を迎えてしまった。戦後もしばらく、マラリアと飢餓のために、社会不安は続き、学校どころではなかった。八重山の離島竹富島で、どのような状況の中で戦争に協力をさせられたかまたどのようにして犠牲を強いられたか、などについて三十年前の青少年時代の生活を綴ることとした。

日本軍が南方各地で敗退を続け、まさに郷土決戦は避けられない戦況となった頃、竹富島にも、小銃兵の一個中隊と、機関銃兵の一個小隊からなる混成隊が駐屯することになった。学校は兵舎として取り上げられ、そのためか爆撃を受けた。その後各小隊は、瀬戸、金城、山盛その他数か所の民家に分散することになった。島の中央部（マイノオン、サージョン、トールングック、ンブフル）と南

って通う日々。

昭和二十年、元旦から始まる空襲、いよいよ激しくなる空襲。二日頃から部落の人々は、思い思いに山へ田へ避難。毎日の空襲。ピナダに集る避難民、家族ばらばら（長男伊舎は三月三十一日召集解除、年令満期）孫二人（小生は勳皇院、姉は病院）はそれぞれ別行動。空襲中での稲刈り。次々殺して食用にする家畜牛馬。毎日来る飢えた兵隊、いもを分け、お米とキニネと交換。次々発熱するマラリア熱、糸芭蕉をくだいて水枕。額にタオル。早朝と夜、細道を通って部落から食糧運び。隣の避難小屋では次々と年寄りや子どもが死んでいく。同じく死ぬなら部落の自分の家で死のうと引揚げた避難小屋。やがて敗戦。

幸いに祖父は生き長らえて終戦十年後八〇歳の長寿を全うして他界した。

戦争で畑を失い牧場の牛馬を失い、空襲におびえていた毎日、一体何であつたらうか。

戦後、食糧危機を脱し、復員兵も帰還し、姉も結婚して長男を産み育てる姿を眺め、曾孫が小学入学する姿をみた祖父は、小生にしみみと語った。「コーニー（子どもへの愛称）、どんな職業をしてもよいが、兵隊にはなるんじゃないよ。兵隊は人を殺すのが仕事だからね。もう一度戦争をしてはいけないよ」と。「のどもと過れば熱さ忘れる」。年月が経つにつれて過去の悲しみ苦しみ惨めさは薄れていく。

しかし、戦争中の恐ろしさ、苦しき、悲しみは益々強く脳裡によみがえってくる。人間同士が殺し合い傷つけ合い、人民一人ひとりや側海岸線（カイシ、シュツサ、カンナーシ）は陣地構築が続けられていた。日中は間断なく、米軍の艦載機グラマンやB二十四などが襲来し、石垣島の飛行場を中心として各離島に爆撃を加え続けていた。夜になると米軍の潜水艦から艦砲射撃を受けることもしばしばであった。明日にでも米軍が上陸するかもしれない不安な情勢であった。

一億総動員令によって、高等科の男生徒は、自宅から通いながら指揮班（班長、西、大西軍曹）に配属された。食糧増産（カンナーシ、カイシ、コンドイのカニフ等民家から提供された畑）や陣地構築のための作業に従事したり、軍事教練や夜間演習に駆り出された。宮崎旅団長の闖兵、分列をはじめ、蝸蝓や散兵壕掘り、学校の側のお宮、ンブールなどは、地下に四方から貫通路をつくる計画で、土、石運搬などさかんにさせられた。また、校庭や前のお獄での銃剣術、シュツサ（島の南海岸）での夜間歩哨、手榴弾の投げ方、国仲お獄での火炎環の詰め方、防空監視、キダールの道での実弾射撃演習、落下傘兵への斬り込み演習、急造爆雷（約二・五センチ厚さ三〇センチ平方の板で作った）を背負って戦車の下敷きになる訓練など、米軍の上陸に備えて、日夜猛訓練が続けられた。

その中で最も身に感え、心に深く残り、今となっては悲憤に堪えないことは、銃剣術と爆雷もろとも自滅する訓練であった。

旧式の三八式銃に着剣のまま、匍匐前進したり、「突撃」の訓練であった。国民学校の生徒にとっては、あまりにも重すぎる銃であった。

「突け」の母令が何十回となく繰り返された。腕が上がらな

くなり、銃剣が肩より下った。全身の力を振り搾って、銃を前へ、そして上へ、上げようと懸命だが、どうしても駄目だ。とうとうしまいは目の前が真暗になった。「馬鹿野郎」と教官の落雷のような怒声が響いた。「鬼畜米英」よりも、わが教官の顔が鬼に見える。かくして、大日本青少年隊員は、「歴史」や「地理」も、そして絵具や毛筆の使い方すらも知らないまま義務教育を終えることになった。

敵軍の戦車の下敷きになり、共に自爆する訓練をさせられた。重い爆雷を背負い、砲壺の中から一気に飛び出し、戦車の前で腹這いに伏せる。伏せると同時に、背負っている爆雷が、投げ出される状態になり、後頭部を強打する。膝を地面に摺って血が滲み出る。教官は敏捷性を要求する。繰り返している間に、後頭部には瘤ができてしまった。ああ、何と情けないことであつたか。「一髪軽からず身命軽し」、万山重からず君恩重し」を実践躬行せよとのことであつた。純真無垢の紅顔の少年達は、戦闘用消耗品に過ぎなかつた。皇國の勝利を信じつつ、あたら青春を捧げる覚悟に徹していたのであつた。かくして、わたしは昭和の一桁生れは、「国語」や「算数」など十分教育されないまま、また「そろばん」もできないままに義務教育を卒業することになってしまった。

## 六、学窓から野戦病院へ

石垣町字大川 仲 嶺 愛 子 (旧姓大浜 十四歳)

病院ではさらに病理関係二人、外科関係と内科関係にそれぞれ十二、三名ずつに分けられた。任務は病理関係が血液検査、結核検査、伝染病検査で、外科関係が交替で手術と看護、内科関係が主としてマリアの治療であつた。これらを含めるいわば一般病棟とも呼ぶべき棟の外に、伝染病棟と重症病棟があつた。伝染病棟はチフス、アメーバー、赤痢等のたちの悪い伝染病患者が隔離されており、重症病棟はほとんど死を待つ傷病兵が軍医の命令で入れられていた。任務の分担があつてもそれが専らに行なわれているわけではなく、昼はそれぞれの分担に就き、夜は全員が交替で内科、外科の当番に當つた。つまり夜は、内科にあてられている者が外科に當ることもあり、その逆もあつたというわけである。特に重症病棟は全員が二人ずつ昼夜交替で看護に當つた。

女学校の生徒といつても当時まだ十四、五歳の少女である。私たちは野戦病院という異常な環境の中へ追い込まれて大人でもぞつとするようなことを体験させられた。患者はマリアの発病者が多かつたが、空襲や戦闘のあつた時には直視できないような傷ついた者が運び込まれた。目がつぶれて顔じゅう血だらけの者、あごがくだかれて、それでも「アンマー、水、水……」と弱々しく訴えている者、腹を射られて息をしているのか、していないのかわからないような者等、まるで地獄であつた。あわただしく動く軍医や衛生兵の中で、私たちもまたふるえて立ちすくんでいることは許されなかつた。どなられながらその次の処置を手伝わなければならなかつた。腕の切断や弾丸抜き取りの手術を見ているとめまいがしたり、気が遠くなつたりした。

一九四五年(昭和二十年)四月、私たちは高等女学校の四年生に進級した。日本が米國に宣戦布告した翌一九四二年(昭和十七年)に入学したこの一期生は、後、戦争の進展とともに学業を中途で放棄せざるをえなくなつた。三年の半ばごろからはほとんど授業は行なわれず、毎日平得飛行場の作業に駆り出された。一九四五年、八重山もひんぱんに爆撃を受けるようになると、傷病兵も増え、野戦病院、海軍病院、陸軍病院は女学校、農学校の女生徒を看護婦として強制した。

女学校の家事課には「看護」という教科があつて簡単な衛生、救急の知識を与えることになつていった。その教科に五月頃から軍医、衛生兵等が来て、女学校の教師に代わって指導を始めた。どのような指示あるいは命令があつてこのようになったかは知らないが、結局私たちが学窓から全員いっせいに看護婦として追いやる力をかれらは持つていた。

看護婦として配属したのは六月十日であつたと思う。全員署名と押印を強要された。四年生六十名程の中、三十名ほどは野戦病院、あとの三十名ほどが半数ずつ陸軍病院と海軍病院に分けられた。私は野戦病院に配属された。

野戦病院は「開南」にあつたが、私たちはそこへ移る前に民家を借りて更に指導を受けた。学校の教師はついていてしたが、もう完全に軍の指揮下にあるも同然だつた。部落が空襲を受けるようになると今度は石垣小学校裏の墓地へ移つた。空襲があると墓の中に隠れ、夜の寝泊りも墓の中であつたが、それでも講義は続けられた。

このような指導を受けて六月の下旬に野戦病院へ移つて行つた。

死亡者の処置も私たちの任務であつた。もつとも屍室まで運んで置いてくるまでであつたが、それまでがたいへんなことであつた。死亡者は一般病棟から出るということはなく、きまつて重症病棟からであつた。そこではほとんど死を待つばかりの人が常に二、三十名はいた。死亡時刻を確認するため全部の患者の脈を取りつづけることが命ぜられていた。

死亡者が出ると軍医が最後の確認をして、あとは私たちの手に移るのである。

まず、鼻、口、肛門に脱脂綿をつめて、それからタンカに乗せて屍室まで運ぶのである。屍室はかなり離れたところに設けられてあり、重症病棟から屍室へ行くには田のあぜ道を通り、やぶの中の道を通つて大通りに出、そこを横切つてまたやぶの中の道を通つて屍室まで届くのである。昼でも相当難儀な道であるが、夜はたいへんであつた。全く灯りのない道を、たった二人の少女が転んでは起き起きしながら、死体に気をつけながら運ぶのである。こわくて知らずのうちにヒュー泣き出すこともあつた。

病院での仕事は傷病兵の看護だけではなかつた。野戦病院には私たちの外に一般女子青年の看護婦もいたが、私たち女学校の生徒と農学校の生徒は一週間交替で細仕事をさせられた。兵隊の食糧をつくるのである。細仕事をしている間はいつい何のためにここに來ているのだらうと考えた。病院に來るまでに受けた看護学も実際の場では役に立っているとは思えなかつた。

またある日兵隊が、宿舎に昼を敷くから全員ついて來いと部落へ連れていった。私たちの宿舎は病院や兵隊の宿舎からは離れたところ

ろに造られてあった。丘と丘の間のくぼ地をさらに掘り下げ、屋根がわずかに地上から出る程にしてつくられていた。屋根をかやで葺いた宿舎は、床は竹を敷いただけで畳もござもなく、寝る時はそのままその上に寝るので背が痛くてたまらなかった。病院の患者の部屋も同じように畳はなかった。

畳を敷いてくれるというので行って行ったが、部落につくと兵隊が、「部落民は皆避難して誰も残っていない。どこの家からでも畳のよいものを選んで運んでこい。」と命令した。

私たちが畳を集めてくるとトラックに積んでもち帰り全部将校の部屋に敷きつめた。結局部落民であり、部落の様子をよく知っている私たちに自分たちの部屋に敷く畳を盗ませたのである。

私たちの女学校は部落のみんなが材木を出しあって、労働奉仕をしてつくってくれたものであった。現在の八重山高等学校の建っているところにあったその校舎も、兵隊がみんな壊わして兵舎に使ってしまった。

このようなおどしと欺きは外にもあった。

はじめ私たちは給料がわずかではあるが支給されると聞かされていた。しかしその後何ともないので皆なで聞いてみると、軍から郵便局にそれぞれ各人の貯金として預けてあるということであった。しかし、結局それも単なる話だけで今だにどうなったのかわからない。

病人の看護に来た私たちの中から病人が出た。過労、睡眠不足、栄養失調に加えて、マラリア、腸チフス、赤痢等の感染性の強い病気の患者を看護していて、病気になる方がむしろどうかしている。

## 第四章 横暴な日本軍

### 一、島民追い出して牛の強奪

竹富村字黒島 東舟道博(十七歳)

一九四四年、郷里黒島をはなれて、石垣の青年学校に入學していた私は、それが当時の風潮であったように軍人を志願した。ところが私の願いは却下された。すでに沖組の近海は軍人や物資の輸送を許さないほど緊迫しており、私より先に志願していった人たちが沖組から鹿児島へ行き着かないうちに、敵潜水艦によって沈められることがたびたび起っていた。その年はまた八重山も空襲を受けるようになった。

翌一九四五年、私は郷里黒島の父から避難をするので島へ帰るようにと連絡を受け三月に島に帰った。島には十二人程の哨部隊という小隊が駐屯しており、広井修少尉(獣医)が指揮をとっていた。

私が帰って四、五日後、かれらの指揮で島の青年男女二十余名が集められ、挺身隊が組織された。私たちは三箇の班に分けられ、上等兵に直接指揮されてかれらの配下におかれた。任務は島民の避難輸送となっていた。哨部隊自身がその任務をもって島へ来ていた。事実、大型猪動艇で島民の輸送を行なうこともあったが、私はそれは表向きで、主任務は別にあつたと今でも確信している。

島には当時、牛が千六百頭いた。私たち挺身隊の者は昼は毎日十五、六頭から二〇頭ほどの牛の屠殺と解体の仕事をさせられた。こ

た程でちる。数人の生徒が発熱した。しかし、当時は病気にいかつても軍医の証明がなければ仕事を休むことはできなかった。病気に闘いながら与えられた任務は遂行しなければならず、とうとう二人の友が帰りぬ人となった。一人は高熱に耐えきれず、水を求めて水田に下りてきてそのままおれた。

またある友は伝染病室の看護当番中に腸チフスに感染した。死線をさまよう娘のために母親が毎日通いつつて看病した。そのおかげで娘は回復した。しかし、母親は逝ってしまった。逆に母親が腸チフスでおれたのである。つかれはてて夜宿舎に帰ってくるのみなで歌を歌った。互いに慰め合い、はげまし合いの歌であった。さびしくなつてみんなほおを涙でぬらしていた。家族がむしように恋しくなつた。何名かの者がそつと宿舎を出て、闇の中を駆けて行った。家族は白水の山奥で避難していた。翌朝の点呼に闇に合せて帰るためには夜じゅう歩いたり走ったりしなければならぬ。それでも出ていったのである。

翌朝帰ってきた者に皆ないつせいに尋ねる。聞くことは同じであった。「家の人たちに会わなかった。見なかった。」と離れてそれぞれの安否を気づかないながらみんな暗い生活を強いられていた。野戦病院は間なくおもとの麓に移つたが、私たちもそこへ連れていかれた。そこでは看護の仕事よりも壕掘りや炭焼きの仕事が多かった。山を下りたのが九月の中旬である。終戦の日から一か月は過ぎていた。

のときだけは、指揮は部隊に八重山出身者としてただひとりいた嘉手刈恒優に代つた。かれは根っからのウオーシャー(豚の屠殺業を営む者)で、その腕を見とまれて特に来ていたのである。夕方になると石垣島からきまつて船がやってきて処理した牛の肉と皮を運んできた。

かれらは島民が自分で牛を処分することを軍命令と称して厳重に禁じていた。それでも避難地での食糧確保のために密殺を行なうこともあったが、もしそれが知れるとずい分ひどい目にあわされた。

島民の面前でなぐられたり、一日中ひさますきをさせられたりした。こういう事情から推して、哨部隊の黒島駐屯の任務は島民を避難と称して追い出し、牛を奪って食糧を確保することにあつたと思うのである。牛は伊古部落の海岸で潰しておつたが、一六〇〇頭の島の牛は三か月後には全滅して、浜には牛の骨で異様な山ができていた。

島に最初の空襲があつたのは一九四五年の二月である。私は三月に帰つたのであるが、そのころはまだ部落をはなれた木の繁みや水の得やすいところなどで、小屋を造つたり防空壕を掘つたりして避難所にしていった。役場からの命令が出て、島をはなれて避難をはじめたのは四月に入ってからである。

避難の指揮は山川がとっていた。この男は前の年に学校の教員として来ていたが、赴任する時は校長も教頭も、視学さえも知らなかった。ちよど時を同じくして、波照間には山下、西表には山本、与那国には山里と、みんな山のついた名まえの教員が赴任しているが、その中のひとりである。もちろんみんな偽名で四人とも軍人で

あった。島の人々にとって山川はまっく得体の知れない男で、スパイではないかとさきやき合うこともあった。

学校へもきちんと行っているのか、道で子どもたちとふざけあっていることがよくあった。学校では教員は足りているのだから行ってもすることはなかったわけである。夜は時々青年や婦人を集めて話をしたりしていた。

曉部隊が来てからはほとんど部隊と行動をともにしていたけれど、避難命令が出るど俄然威圧的となった。まだ二十四、五歳であったが、軍人の本性をまる出しにして居丈高となり、島の人々に怒鳴り出した。黒島の人々は西表島のカサ崎へ避難したのであるが、五つの部落の避難していく家の順序も山川が命令した。輸送は曉部隊の大型発動艇がとることもあったが、島のサバニが出ることもあり、その時の船頭も山川が命令した。

避難輸送は昼は敵機を避けて夜行になっていた。私が負傷したのは七月三日の午後八時ごろである。大型発動艇は保里の棧橋の西の通称アサビナ（遊岩）の下に、舳先を突込むようにして、昼は偽装をして置いていた。ちょうどその日は潮の関係もあったので私たちが船を沖へ押し出す役としてついていた。

現場について偽装の草や木を取り除くと、船はエンジンをかけてバックを始めた。

わたしたちの役はそれを前から押すことである。あの船はかなり浅いところにも浮くようにできていて、間もなくすると船が浮いたので、それぞれ船に飛び乗った。船はやがて前進をして方向転換をしはじめた。ところがその時私だけはまだ船に乗らずに舳先にぶら

棧橋から開南までは八キロほどあるが、途中三回も米機の襲撃を受けた。飛行機がやってくるど運転手と助手席にいた他のひとは、車を止めて道のそばの草むらへ逃げた。私はその間車の中でころがされたままであった。幌のない車で、飛行機がよく見え、旋回して向ってくるときは自分に突込んでくるようであった。あのと時の状況は今でもあざやかに思い出されぞとすることがある。からだが動かせないで、ダダダダダという弾の音を聞きながらただただ目をつぶっていた。

さいわい、三回の襲撃でも傷一つ負わずにすんだが、病院では、私は右腕をつけ根から切断されてしまった。マスイから覚めて気がついた時は気が遠くなるような妙な気持がした。からだの右半分が軽くなって重心がくずれようであった。しかしそれよりもっと切実なことは、並みの人だからだがちがうという事実が私を苦しめはじめたことであった。まだ二十歳にもなっていないかった私はその後ずい分失望し、劣等感におそわれた。

九月一日に、私は病院を出た。その日、私は旅団本部から電話で呼ばれた。私はひとりて於茂登山の中腹まで歩いていった。先に、それまで農学校にあった旅団本部は、戦火がはげしくなるとそこへ移っていた。

八重山防衛と称して、八重山全島を指揮していたこの旅団本部が解散したのは九月六日である。私も九月六日までそこで過した。ここは病院とはちがって、食べ物はずい分せいたくでめずらしい物があるというところであった。解散をした日、私は名前がわからなかったが、中隊長からおすとめすの二頭の牛をもらった。おそらく石垣島内の

さがっていたのだ。しかも船はじゅうぶんバックをしないで動き出している。「いけない」と思った瞬間、船は前面の岩壁に激突してしまった。私は心臓の止まるほどの衝撃を受けて海へ落ちた。右腕をくたかれてしまったのだ。

これは後で聞いたことであるが、腕からふき出る血で赤黒くなった浅瀬で私はころげ回っていたという。私は戸にのせられて曉部隊が宿泊していた玉代勢家に運ばれて来た。事故を知った部落の人々が集まって来る。私の家はすぐ隣りであるが、母は私が死んだと聞いて泣きながら駆けつけて来た。しかしかれらは母をひき止めて私に会わせなかった。

その日は避難は中止され、大型発動艇は私を石垣島へ運ぶことになった。私は伊古の棧橋へ運ばれ、そこから石垣島へ向かった。船の出たのは午後十時ごろであったと思う。船には五人の隊員がいて私を看護していた。そのころはようやく意識ははっきりしてきていたが、痛みは堪えられないほどであった。腕は根本を布でしっかりとしめつけられていたが、しめつけたままではいけないというのでときどきゆるめられた。とそのときは、血がどっと流れてまた気がとおくなるような感じがした。

石垣島に着いたのは夜中の十二時ごろであった。当時棧橋を上がったところに「池端」という海運会社があったが、船は私をその会社以降ろすどそのままひっ返していった。一人が付き添いとして残ったが、かれが開南にあった野戦病院へ連絡をとった。私はそのままの姿で夜を明かすことになった。

翌朝八時ごろトラックがやってきて私をのせ、病院へ向かった。

どこかの農家から没収してあったものが、隊の解散、隊員の帰還で処分に困ったと思う。私はその牛を引き連れて黒島へ帰ってきた。ところが島につくと、私はその牛を二頭とも、思いもかけず島の人に横取りされてしまった。かれは自信たっぷり主張した。

「私は軍隊に家を貸していたが一銭の金も受け取らなかった。だからこの牛は私のものだ。」私はかれの妙な論理に憤慨したが、年の若かったせいもあり、かれのけんまくにおされて牛の手綱をはなしてしまった。小さな島の同じ部落の、しかもすぐ隣のおやじである。これも戦争のためであろうか、なんとさもしい根性だろうと思つた。

いま私は石垣島へ移ってきて、セールスマンをしながら生計を立てている。それだけでは家族を養うことはできないので、土曜から日曜にかけては近くの学校の守衛もしている。子どもたちもまだ小さく、これからは生活はきびしくなる。片腕の無いということが就職するにもひびいていた。私から牛を取り上げた人は戦後、島の条件を生じて牧畜業を始め、現在かなりの事業に広がっている。今さらつまらないと思いつつも私は、二十七年前のことを考え腹を立てることがある。

## 二、新築の夢無惨にも破られる

石垣町字大川 池 田 安 秀（三五歳）

当時私は三十五歳、働き盛りで隣近所の人たちも私のことを「働き

もの」といって、ほめてくれていたものである。

私の家は旧家で、先祖代々の田畑があり生活もかなり安定している部類にはいった。

しかし、住宅は祖父の代からのものでずい分古くそろそろ新築をしなければならぬと、父と私は一生懸命働いてその準備をすすめていた。

石垣島は当時木材が豊富で建築資材を山から切り出すことができた。「ばふ」(多数の人を頼んで仕事をしてもらうこと)をして新築に必要な材木を集めてあった。なお不足の分はいくらか買うことができ、瓦も購入してそろそろ新築を始める運びになっていた。

当時としては、今日のようにトラック等のような運搬の手段がなく、牛・馬車を利用して山から材木を出していた。あの時の苦勞はことばではうまく表現できないものである。

もし金があったとしても今日のように自由に購入することができず、簡単に建築資材を集めることはできなかった。おまけに、お金を持っていると思われると、やれ貯金だ、献金などおいたてられ、自分の金を自由に使うことができず、全く誰の金なのかわからなかった。

また、これだけが必要なので、ことわるものなら、入れかわり立かわりおしよせ、「国のためだ、天皇陛下のためだ」とはやしたてられ、そうなることわりきれなかった。しかし、私のところは幸い妻子を台湾に疎開させることができ、疎開地では生活費にということで貯金をおろすことができ、ほとんどおろしたように記憶している。

はなしはちがうが台湾では貯金がおろせるということで、他人の貯金をおろしてきて、その金額の三分の一とかひどいことになる。二分の一をまきあげて他人の金で肥えるという悪らつなブローカーが暗躍していたという。

しかし、それでも八重山の人たちはありがたがり、多くの人たちが利用していたと聞いている。戦争という是誰でもそうだと思うが、まったくひどいもので、いいたいこともいえず、食べたいものもやれ供出だ、徴発だといって、牛・馬扱いにされ兵隊は有無をいわさずかってなるまいをなし、住民の生活は物価統制令とか、物資配給等でしめつけられ少しでも人間らしい生活をしたという、今では当然のことが、当時は国賊扱いされたのだから今日の若い人たちに想像もつかない苦しいものがあつた。

私は戦時中は警防団員で徴用には余りいかなかったが、それでも家族のものに言わせると働き手をとられて、ずいぶん苦勞したということである。しかし、今でも私がやるせない怒りをおぼえるのは、先に話したように苦勞して集めた建築資材(材木・瓦)を軍の兵舎をつくるということで強制的にとりあげられたことである。

当時は住宅建築も自由にできず知事の認可が必要で、それも十五坪以下の家をつくれということで、認可申請をしてみたが、その矢先のこと「ズマカラド、クンジョウウクリリヤ」(どこからともなく全身に怒りがこみあげてくる様)、とうとう兵隊にくつてかかった。すると「もし日本が戦争に敗けたら、作った家もどうなるか、戦争が終つたら必ずかえすから、がまんしろ」と彼はいつたがそれでもなぐられることを覚悟で懇願すると、「それでは、何本か

### 三、無謀な疎開命令

石垣町川平 部落会長 喜舎場 兼美(四十歳)  
喜舎場 兼次郎(三九歳)

八重山にはじめて空襲のあつたのは、一九四四年(昭和十九年)の十月十二日であつた。それから一か月たつて、石垣町宇川平は部落ごと宮崎県に疎開するようにとの軍命令が下つた。そのころすでに八重山の周辺はもちろん、本土までの海域も敵によって占領されつつあつたことは部落民(住民)の間でも常識となつていた。

そのような状況のなかで宮崎県までたどりつけるはずがない。住民は軍の無謀さに怒り、反対しつつも、軍の命令とあらば絶対服従であり、死を覚悟でその準備に取りかからなければならなかつた。

その時の状況を、当時部落会長兼区長であつた喜舎場兼美氏と喜舎場兼次郎氏の話、及び日記をもとにして明らかにすると次のようになる。日記は兼美氏のものである。

日記

昭和十九年十一月十二日、町民税ノコトデ役所へ行く、川平ノ疎開問題ヲ聞イテ吃驚仰天。名蔵部落ノ慰問。

兼次郎氏談

私が疎開問題を聞いたのは、名蔵の陸軍部隊の慰問に行つていた時の席上であつた。

私たちは慰問団を組織して各部隊の慰問に行つたりしていた。その日は、名蔵部落からの要請で行つた。責任者の兼美は役所に用事

君の分をえらんでもよい」ということで、十五本程残すことができた。勿論代金など支払うはずがない。今考えると、誰の所有物なのか全くわけのわからない無茶な話であつた。でも残したという喜びで、むしろ兵隊も話せばわかるのだと感激したものである。そんな例はほかにも沢山あつたと思うが、私の場合は瓦までとられたのでほかの人たちより怒りがおこさかつた。

日本軍がサイパン島で敗れ、石垣島の軍隊の動きがはげしくなると、煙を出すことが禁じられ、瓦焼工場は操業を停止させられ、かわらの植段は高騰していった。だから、貧乏人が瓦葺の家をつくることは、一生一代の大事業であり、そのことが農民の夢であり、また社会的地位を認めさせることにもなつたので、あのことは一生忘れることがないと思う。

戦争の犠牲はいろいろあるが、もう一つ今でもしやくにさわるのは、農民にとって死活問題である耕作地の損害である。私の水田はシラミズ(大川、登野城の住民が戦時中避難をし、悪性マラリアで多くの犠牲者を出した所)にあるが、当時その一帯はあちらこちらに壕が掘られ、おかげで私の水田が掘りおこされた土砂に埋め立てられてしまった。

私たち農民にとって、水田は生命であり、おまけに収穫した米も供出で取りまくられるし、このままでは食糧の確保も保障できず、戦争がながびけばどうなるのだろうと家族をかかえて不安で、とほうにくれてしまった。

勿論損害賠償などがあるはずがない。全く泣き入りをしたものである。軍隊はひどい、戦争はむごい地獄だと思つた。

があるからと行き、その帰りに私たちの所へ来た。疎開のことは演劇の終わったところで明らかにされたのである。とたんに団員は顔色を失う者、口のきけない者、泣きだす者など、死刑を宣告された者の様であった。

慰問後の慰労会の席上で出された酒を飲み、その勢で隊長にさんざん苦情を述べ海軍の疎開命令の無謀さを話し、何とか取りやめさせるよう働きかけてほしいと申し入れたが、いつも対立している陸軍と海軍ではどうしようもなかった。その晩から部落は大きわぎとなった。

日記

十三日 味噌・醬油配給

疎開問題ニ関し、警察署長、仲本部長、助役宮良信智氏来字講話

十四日 署長、助役婦片

仲本・宮良両氏ト共ニ疎開事務

兼美氏談

警察署長や助役などが来て疎開の件で講話をした。部落民は表面的には納得したようであった。しかし、部落民だけになると、乗船の日、山中へ逃げこむとか、防空ごうにかくれるとか、どうせ死ぬんだからこの地で自殺するとか、特に老人の声は強く、私自身も本当にそう思った。ついに、「みんな生れ育ったこの地で骨を埋めたい。疎開中止の陳情をしよう。軍の命令にそむく者、非国民とされ、たとえ死刑にされようとかまわれない。」と意見がまとまり、代表が派遣された。

私は部落の責任者として行った。その日事前に県会議員や農業会

私が中止になったことを伝えると、特に老人は涙して喜び、この地で骨を埋めることができる、死をまぬがれた、この島内ならどこへ行ってもかまわないと、その喜びようは何とも言えないものであった。

日記

十一月十九日、雨ヲ冒シテ旅団長宮崎閣下東畑少佐殿、一木中尉、井上隊長、高木大隊長、支庁長真玉橋属、富川農業会長、平良技手、宮良永益来字（注字は字川平）、渡部隊長宅ニ会合。

十一月二十日、八時ヨリ閣下、井上隊長ノ講演。十時ヨリ井上隊長、翁長町長、富川会長ト共ニ境界見定メニ。

十一月中に立退ク可キ区域

1、南風成氏宅ノ後道ヨリ東、本道ヨリ会館迄ノ北、外ハ一月中旬2、清一氏ノ田ノ西道ヨリ西ハ一月中旬ハ出入自由、十二月以降ハ午后三時ヨリ六時マデノ間ニ出入ス、県道ハ一月中旬が通行出来以後禁止

兼美氏談

移転先は崎枝と決ったが立ち退くまでに日数がない。小屋つくり、農作物の収穫、道具の運搬、それを徹夜でもしなければ間に合わない状況となり、部落総がかりで仕事に取りかかった。

日記

十一月二十一日、転出先ノ物入小屋作り、各隣組本日ヨリ総掛り

兼美氏談

部落総掛りと言っても、男子はほとんど召集され、女・子供・老人しか残っていないわけで、その仕事は大変なことであった。

長、その他の方々に実情を話し、支援を依頼して会議にのぞんだ。井上隊長は日本刀をカチャカチャさせ、「切り捨御免」もしかねない態度であった。

びくびくしながら覚悟を決めて話した。

「私たちは軍の命令に反対するわけではありません。しかし、ここ暖い八重山に住みなれた者が、今本土へ行けば、もう冬だし、衣服もなく、凍え死ぬでしょう。それで、せめて気候的に似ている台湾あたりへ行かせてほしい。」と言った。井上隊長は「台湾はもう疎開を受け入れていない」という。「しかし、敵機来襲も多く、はたして宮崎県までたどりつけるかどうか心配ですが」と言う。「君達が途中で敵に沈められて死のうが、内地で凍えて死のうが、僕の知ったことではない、この計画は畏れ多くも陛下の定められたもので、今さら変更するわけにはいかん。」と実にむちゃくちゃなことを言った。それでも、「今ごろになって疎開する理由は何ですか。」などと、多くの人がつきつきと発言しました。

結局、川平湾の見えない所へ移転することを条件に、疎開は中止となった。

日記

十一月十六日、転出ニ関シ、関係当局ニ陳述ノ為出四（注四は四カ字のこと石垣町官庁所在地）支庁会議室ニ於テ、順調ニ進行、九州転出ハ中止ノ決定ヲ受ケタ。

十一月十七日、九州転出中止ノ情報ヲ聞イテ、部落民一同歓喜、陳情ノ甲斐アツタトツクヅク感ゼラル。

兼美氏談

学校は当然のことながら休校にしてみら子供たちも総掛りで移転作業をした。

川平国民学校の沿革誌「十一月二十一日日本ヨリ、部落移転作業ニ協力（高田方面）」

日記

十一月二十三日佐藤少尉、支庁長、町長、農業会長、土地改良所長、視学、転出先ノ敷地ヲ見ラル為来所、分散シテ建設スルコトニ決定。

十一月二十七日耕地測量ニ行ク。

十一月二十八日用材ヲトラックデ運搬シテ貰ウ、午前中昨日ノ測量、午后隣組長ト共ニ宅地ノ分配、大浜ヨリ馬車十五台来。

兼美氏談

私は自分の荷物をまとめる暇がなくて困った。来客の相手もしなければならぬし、測量などにも立合わなければならないし、運搬作業の手配もしなければならない。さらに軍からのいろいろな供出にも応じなければならないと、夜も充分寝れない日々が続いた。

結局、妻だけに家のことはまかせきりで自分のことなど考えられない忙しさであった。

兼次郎氏談

家財道具を運び、家をくずしてその材料を運び、家を建て、農作物を収穫していく、その仕事は本当にたいへんであった。第一力のある男たちがいない。年寄と子供と女ばかりで全戸移転しなければならぬ。その頃の崎枝までの道はとても悪く、馬車の数もわずかで、小学生まで荷を運んでいた。材木や大きな荷物は四カ（石垣

町)や大浜あたりから馬車が来て運んでくれて本当に助かった。

馬車徴用と言って命令されて来たと思うが、二十台ほど来ていた。その人たちのおかげで、必要な道具は最少限運び、作物も収穫できる分はできるだけ収穫し、いよいよ明日中にこの部落を立ち退かなければならない、と迫った日には、九分通り以上の荷物が運び出されていた。残るのは先祖の位牌と寝具の一部、ナベ、食器ぐらひであった。

明後日以降はいかなる理由にせよ部落への立ち入りは禁止ということであった。

ところが、その十一月二十九日の夜になって、今度は移転しなくてもよいと言う命令が出された。私はもう怒って、今更何を言うかと軍隊の所にどなりこみたい気持であった。

本当に頼にさわったね。住民を一体何と考えているのか、いざとなったら、この島を守るのは我々住民なんだ、兵隊などにひげは取らないと思っていたのだ。

しかし陰では何と言えても、当時は憲兵、警察の目が光っていて、軍をわるく言うとすぐ非国民扱いであったからどうにも仕方がなかった。

#### 日記

十一月二十九日 移転荷造り中ノ処、支庁長、町長、農業会長、大田調査部長、南風見開懸所長。来字ニ付、移転ニ関スル色々ノ打合せ、午后三時、海軍参謀(大佐)部隊長(少佐)井上隊長来字。

移転ノ件話シタ結果、湾ノ見エザル様ニ鎖塀スレバ移転センデ好イトノ事ニ話シハ決定。

島内の崎枝への移転となり、続いて中止、最後に大將らしき者が来て柵を作れということになったようだ。

秘密兵器があるからということ、すべてを軍の命令、陛下の命令だとして住民を全く無視したとさえ考えられるような扱いであった。

#### 日記

十一月七日 海軍設営隊副長大尉別所太喜次、原田組、大和田児玉氏来、同行シテ湾内眺視、全氏方 午後四時帰宅。

#### 兼美氏談

敵の上陸に備えて急いで人間魚雷基地をつくったものと思う。何の予告もなく、すぐ「疎開せよ」であったから、海軍のこちらの部隊の気まぐれと住民不信が、私たち川平部落民を精神的にも肉体的にもいためたつた。

私たちは兵隊のために慰問団をつくるなどして心をつくしたのに……。

#### 四、警察署長の証明書をもちてこい

大浜村字真栄里 仲山 忠英(三九歳)

戦争中は「勝つためには」ということばの魔術には、大変困まりましたよ。靱や牛馬の供出を当り前のこととして農民に割りあてる。断れば困賊呼ばわりだから、どうにも仕様がなのです。みんな心では泣いているが、断わるわけにはいかなかったのですね。

移転問題ハ非常ニ頭ヲ痛メタ一生ノ大事業ト思フ、一段落シテ安心、防諜ニ気ヲ付ケルベシ。

#### 兼美氏談

海軍の大將が来て、移転しなくてよいから柵をつくりなさいという事になった。部落に住めるという安心はあったが、これまで多くの荷物を運び、家をくずして運んだその苦勞も考えず、簡単に移転しなくてよいと言うのだから全くデタラメだと腹が立った。結局、従わないわけにはゆかず、多くの荷物や木材など持ち帰る力などなく移転先でほとんど捨ててしまった。もったいないことをしたと今思い出しても残念でならない。力がなかっただけでなく、時間もなかったからね。徴用とか柵つくり等にほとんど駆り出されていた。

#### 日記

十一月三〇日 湾ノ見エナイ様ニ垣ヲ作ル為、部落総動員シテ同仕事ニ着手。

#### 兼美氏談

道路に沿って湾に面した所に三メートルぐらいの鎖塀をつくれと言ふことだから、山から木を切り出し、スキ、黒ツグの葉などを取り寄せて、それにくりつけていく。今思うと実に馬鹿げたことをさせたものだと思う。

川平部落移転の真相は「川平湾を海軍特攻基地、つまり、人間魚雷基地として利用する、そのため近くに、住民がいては困るということ」で井上隊長は疎開を命じた。「こういうことになると思う。それが先に述べたように当時としては部落民の最大の抵抗にあつて、

「勝つためには」と言われると、何とも返すことがなかったのです。軍は「勝つためには」ということばによりまして何をやってもよいことになっていたので。

農民には靱の供出、立木の供出がありました。立木は、こちら八重山は、台風の中心地ですからね。先祖は福木など、台風にびくともしないのを植えると、四〇年五〇年やっつと、防風林になるのですね。そういう立木を供出させるのです。先祖はきつと、地下で泣かれたことでしょう。

献木というものもありましたね。これは当時の農村ではイヌマキなど一等の建築材は、山から切り下ろして、海岸の砂に埋めて、虫よけの作業を五、六年もする。それから持ち帰って材木小屋を作つてそこで保管する。毎年山から伐りとつて、貯えていく。一家を造るのに一〇年ないし一五年計画で、材木は揃う。一生一代の計画であったわけですよ。これを唐突に、「勝つために」献木を命ぜられるのです。七〇歳八〇歳の老人は、ほんとに泣きましたよ。親子二代かかって仕上げる計画ですからね。一生の大事業が、献木の命令一つで、おじゃんですからね。ほんとに泣いていましたよ。

おまけに、つい最近(一九七二年春)戦災補償申請をやれというが、材木や牛、馬は補償の対象にしない、というから、農民はいつまで、ふんだりけつたりかと、怒っているのです。

一九四五年(昭和二〇年)六月第三避難所へ避難命令が出ると大変でしたよ。

住民は人里を離れ、農地牧場の管理ができなくなるのですね。供出で牛馬がとられるまでは、まあまあ、一応「勝つために」の略

奪も、白昼まかり通って、泣かせたものです。桃里牧場の牛馬なんかは、供出によらず、消えてしまったのです。演習の形式で、鉄砲で牛馬は打ち殺される。ら致されるそして食用に供される。

私も、名蔵地帯の山間あたりに避難していましたがね。そこから、農耕用の牛がよく消えるのです。隣りの人の牛が消えた時にその人はほんとに働きの牛を失って困っておったのです。たまたま、知り合いの土地の出身の兵隊さんと相談してつれ戻してもらったようです。その兵隊は、この牛は叔父所有の牛が迷いこんで来ているから、主へ返しましょう、と上官の許しを得て取りかえしたことがあったのです。これは終戦前七月のことです。

私も同じように牛をとられましてね。しかも八月十五日後なんですよ。「勝つために」という言葉の魔術を使つての取り上げなら、魔術師には敗けますよ。しかし戦争に敗けてからは、同じ魔術「勝つために」の魔術は軍は使えませんよ。しかし、終戦後も、軍は厩から牛馬を取りあげるのですからね。軍部というのは、「勝つために」あるのでなく、「略奪するために」あったのですね。

八月下旬、私の農耕用の牛が、たんぼのあぜから消えたのです。名蔵の機関銃部隊の仕業だったのですね。いどころを、よく家で世話になった兵隊が、教えてくれたのです。私は乗り込んで行きましたよ。行ってみたら、牛は森の奥深くかくしてあるんですね。近くにいた兵隊に「これは私の牛だから、返してくれないか」と頼んだら、その兵隊「私にはわからないから、隊長に会ってくれ」という。私は意を決して隊長に会った。

私「この牛は私のものです。一頭しかない耕牛をとられて困っている考え方は、占領地に乗り込んで来た軍隊と同様で、いろいろな面で住民生活を圧迫した。」

私は、当時、黒島国民学校の校長でした。空襲もいよいよはげしくなった頃、革命によって、私は島の人々と一緒に西表島の東部カサ崎に避難しましたが、そこでは一粒の米もなく、毎日潮干狩りにでて、貝や蟹などを採って生活しなければならなかった。その状態だと栄養失調で家族が死んでいくことは、火を見るよりも明らかであった。何とかしなければと、近くに避難していた兼久さんと二人で、西表島西部の千立部落に、監視の目を避けてくり舟で夜渡った。千立部落では、稲刈りが始まっていて、それを手伝えば一日に一斗の粃がもらえた。頼みこんで働かせてもらった。「先生方も食糧がないんですか。お互に苦しいですね」と部落民に励まされ、あるいは部落民を励ましつつ四日間稲刈りを手伝い、五斗の粃をもらった。

それだけあれば自分の間は妻子の生命をつなぐことができる、喜び勇んで帰る途中、くり舟に乗った監視中の隊長にみつかり、ピストルをつきつけられ、現在の西表小中学校の前あたりにあった部隊に連れ戻されました。その時、隊長と一緒に乗っていたのが、古見石人と崎山用能であったが、護郷隊とどんな関係にあったかは知らない。

戦争とは一体何んだらう。住民を守るために来た筈の軍隊は、このように理由もなく、住民を苦しめるし、自分の妻子の生命すら守れないような状態でおもも戦争をしなければならぬのか。軍隊は、供出と称して、住民の米や野菜、さては労役に使用している牛

ています。ぜひ返してください」

隊長「これが君の牛だという証明書をもってこい」

私「誰から証明書を貰いますか」

隊長「警察署長とか、村長とか」

私「警察署長や村長は、これは私の牛だということはわかりません。しかし、証人を連れてこいといわれるなら、いくらでも連れきます。連れてきますか」

隊長は返答に窮し、しばらく黙っていて、

隊長「では、一応つれていきなさい。そのうちに呼びだしがあるかも知れない」

私は氏名と住所を書き残して、さっさと連れ帰った。帰るときはほんとに急ぎましたよ。後から何かいわれはしないか、何かされはしないか、という心配でね。

私は幸い取り戻すことができましたが、そのまま消えてしまった牛の主は、マラリア熱にうなされながら泣いていましたよ。私の場合も、あと一、二日でも行くのがおくれたなら、どうなったか知らない。

「勝つために」ではなく「略奪するために」という印象が、どうも消えませんね。

## 五、報酬の粃まで取りあげる

石垣町字大川 宮良 長義(四十歳)

「住民を守るために我々軍隊は来ているのだ、ありがたく思え」

馬までも取り上げているが、住民に背を向けられての戦争が果して可能なのか、住民を苦しめて何が戦争かと腹立たしく、その夜は寝ることができなかつた。

翌日、隊長に呼び出されて詰問された。「お前は どうしてここから粃を持ちだすのか」と。「粃を持ちだすことがなぜ悪い、私が働いて得た粃ではないか、食物がなくては妻子は死んでしまう。妻子を見殺しにして戦争ができると思うのか」と喧嘩ごしであった。次の日は未明に起きられ、裸にされた。何かひどい目にあわされるなど覚悟していたら、田鎌をもってきて、一日中田を耕やせという。そんなことならおてのものだと、フンドシ一枚で一日中田を耕した。次の日もまた隊長の呼びだしをうけた。今日はまた何をやらされるのかと思っていたら帰っていいということであった。恐らく、粃はくれないだろうと思っていたら、良心がとがめたのか、粃はそのまま渡してくれた。

軍隊は、住民と苦楽を共にし、住民と共に戦うという考えは毛頭なく、いかに住民を抑圧し収奪するかという考えしか持たないように思えた。住民を守る筈の軍隊は、占領者顔で、その地域を支配し、住民を酷使する。それが日本軍の実態であった。

## 六、献木といって強奪

石垣町字石垣 新城 義雄(四一歳)

戦争中は何でもかんでも供出供出といって住民のものをとりあげ

ていました。材木などひどいもので、そのために戦災の復興はおくられたと思います。山林の木はもちろん、防風林として屋敷にある木までも切り倒して持ち去ったわけですから……。

石垣には農民だけで組織した石垣平和農事会があつて十町歩余の松林を持っていましたが、軍への献木ということでとりあげられてしまいました。最初は組合一人あたり五本の献木ということで、切り倒して渡すまでの仕事を命ぜられました。ところがその後は何のことわりもなく兵隊達が、閣下の命令といって切り倒して持ち去り、結局ハゲ山になってしまいました。私たちには五本を倒すための人夫賃程度を与えてすべてを奪い去り、兵舎、防空壕などを作る材料にしてしまいました。同じようにして、学校林、町有林なども何のことわりもなく伐採してしまいました。町有のみごとな楠林がありました。それも兵舎に使用されていきました。木は強いし、かおりはいいし、「本当にもったいないナー」「乱伐してひどいものだナー」と当時でも思いました。私も二十本ほどのイヌマキを持っていましたがそれをどうすれば守れるか、隠してみつかれば罰されるし、苦勞して取り寄せた木をミスミスわたすわけにもいかず頭をいためていましたが、非常に親しい兵隊がいたので相談すると、「防空壕に使いなさい、それなら取りあげられる心配はない」と教えてくれたので防空壕の上に並べて取りあげられずすみませんでした。終戦と同時に取らだして大事に保管していましたが、生活苦にたえかねて売ってしまいました。もつとひどいことには、避難して空屋になっている屋根をくずして持ち去ったところもありますし、学校の校舎などもくずして山に兵舎を築いたものです。「軍の命令

## 七、島民いじめの軍隊

与那国村字与那国 大屋 為吉(二一歳)

福里 豊(二一歳)

波平 石戸(五六歳)

与那国島には、監視を主目的とする中川兵曹長(海軍の准尉)の率いる十数名の海軍と、島の防衛を任務とする森谷隊長の率いる二十数名の陸軍が駐屯していた。

海軍は、うらぶ山頂(島の中央部にある島で一番高い山)に陣地(監視所)を築き、日夜交替で、その任にあつてた。それも、一九四五年(昭和二十年)一月十四、十五日、監視所は、米軍のB24偵察機の襲撃を受け、もろくも燃え落ちた。以来島は数度にわたる米機の機銃掃射を受け、久部良港(漁港)に浮ぶかつお漁船とその工場が破壊され、民家も類焼をうけ、久部良部落の八〇パーセントが焼けおちた。村役所の所在地である祖納部落は、幸いかわらの破損程度の被災でまぬがれたが、防衛隊のやむことを知らない食糧(米・野菜・家畜)の供出と、悪性マラリアの猛威におびやかされていた。栄養失調と医薬の皆無の状態のなかで、死亡者はあをたたくた、村民の生活は極限に達していた。

## 証言 I 大屋 為吉

—うらぶ山監視所と小学校の勤勞奉仕—

当時、わたしは、小学校の三年生で、他の男の子と同じように、

「とさえ言えば、住民を大畜生以下に扱ひ完全に無視して何でもできる時代でした。

当時、川平の部落会長であった喜舎場兼美氏は木材の供出について日記の中で次のように記しています。

八月九日

供木ノ件ニ関シ、軍部ヨリ春岡義雄曹長支庁金城光榮、県木社

崎山用貴三氏来、午後三時ヨリ開始。

八月十日

木材供出廻り。

八月十一日

木材供出廻り。

八月十二日

木材供出廻り。

喜舎場氏の日記の中に川平部落での総本数を記し、その内訳を各戸記してありますが、主なるものは次のとおりです。

立ち木 六〇七本。手持木、四二九本。

立ち木の内訳。波照間五五本。大屋四七本。白保二六本。

手持木内訳。大仲松七〇本、糸満三九本。直吉三七本。

八月二四日

立木、伐採始々。

大人になったら、兵隊さんになろうと大きな希望で、胸ふくらませていたことです。学校には確か先生のほかに軍人も姿をみせ、その軍服姿に魅せられていたようです。だから先生から「今日はおうらぶ山にレンガを運びます。」といわれてもいやでもなく、むしろよろこび勇んで参加したものです。しかし、実際にレンガを二個かついで、急な山道を登るのは、大麥骨の折れることでした。何度か足場をふみはずし、先生に「しっかりがんばれ」とはげまされながら、山頂にたどりついた時はすっかり疲れきっていました。海を渡る冷たい山頂の風は、汗だくの体になんともたとえようのない気持ちでした。

四年生以上は一日に二往復もしたのですが、水をバケツで運びあげたようです。文字どおり村民総動員で、築きあげた監視所も、偵察機の機銃掃射で燃え落ちたというのですから、今考えてみると腹だたしさが先にたち、あほらしくなります。

## 証言 II 波平 石戸

私たち夫婦は、息子を兵隊にとられ、末の息子は小学校の一年生で、島に残ったものは徴用だ、やれ供出だ、増産にはげめとなにからなまでに、命令で動かされていた。

供出ししろ、徴用にしろ村役所を通してくるので、こんな小さな島では、まぬかれるすべがなかった。おまけに徴用は「ウヤダイ」(島に残る共同奉仕作業の慣習でおこたるものは罰金を納める)ということで、稲の収穫期とか、植付期の農繁期に「ウヤダイ」がまわってくると、やむをえず、他の人を金で雇い徴用をはたしたのも

です。わたしたちは兵隊のことはよく知らないが、しかし、島の部隊は食糧はすべて供出でまかなっていたようです。いったいこの部隊たちは何のために島にきたのか、徴用、供出で村民をまくしたてるだけで、何をしたというのだろう。ほんとうに戦争はいやだ、二度と起してはならない。

## 証言Ⅱ 福里 豊

私の家族は、久部良が空襲で焼けると、畑の近くのほら穴（島にはいたるところに珊瑚礁の自然の洞窟が散在している）に避難した。ありったけの食糧と家畜をはこび、長期戦にそなえる覚悟でいた。ですから食糧の確保は、文字どおり死活問題でした。米はほら穴の一番奥にしまいこみました。豚は親戚や近所のもので屠殺し、食塩で漬けて保存した。山羊は野生の草だけで養えるので、最も貴重なものでした。それで、いつも腹をすかさず、満腹にして鳴き声をたたきぬようにした。もしも、鳴き声もれるものなら、それをそ軍にみつかって供出させられてしまう。先ず自分たちが生きながらえることが第一だ、それこそ、私たちの最大限の抵抗でした。

村民は、みんな必死でした。そうすることは、村民の最大公約数的な無抵抗の抵抗だったと思います。しかし、家族のものがマラリアにやられると医者にもかかれず、薬もなく、やむをえず、兵隊の薬と食物を交換することもありました。与那国島に駐屯した日本軍は、島民の純朴な慣習をたくみに利用し、軍部の有無をいわさぬ権力をかさに、島民の生命財産を守るということは、うらはらに抑圧と略奪によって、島民の生活をおびやかし続けた何ものでもなかつた。

## 九、命令命令でこきつかう日本軍

石垣町字名蔵

（台湾よりの移住者）王能通（三〇歳）

黄四郎（二八歳）

王能通氏談

八重山に移住してきたのは、一九三九年（昭和十四年）で二十四歳のときでした。親戚の印鵬（キウホウ）に道路作業の工夫として呼ばれて八重山へきたが、名蔵一帯の広々とした未開墾地に魅せられ、農業をする決意をしました。

それから名蔵開墾に精いっぱいがんばっていましたが、私にも日本軍から徴用令状がきて、毎日のように徴用で働かされました。農業もほとんどできないような状態におこまれ、それでも何とか作物を植えなければならぬと毎日そのことばかり考えていました。幸い二、三日間雨が降りが続きましたので、いまだと思い徴用にもいかず農作物の植え付けを行いました。ところが徴用にこなかったというわけで、私はさっそく中隊長に呼ばれました。中隊長は「きみたちは国のために働かないつもりなのか」とどなりつけたのです。私は「作業に出なかったのは、国に奉仕しないという訳ではない、雨が降って農作物の植え付けを急がなければならず、そのために徴用にでれなかったのだ」と説明し、「農作物を植え付けるのも国のためになると思います」と答えました。おこっていた中隊長もやっとなんか考えたことでしょう、後では激励していました。

何も考えないで、ただ命令、命令といはるのが軍隊であったよう

たということでしょうか私は考えられないのです。

## 八、馬車の徴用

石垣町字登野城 新城 信政（五十歳）

太平洋戦争に突入し、終戦を迎えるまでに多くの人民の労働力がほとんど無報酬で軍に提供され、生活苦をよぎなくされた。軍事体制下の住民の生活は、働き手を失い、土地をうばわれ、自由を束縛されるなかで多くの住民が戦場へ、戦場へとかり出されていった。

サイパン島玉砕のあと、八重山にもいよいよ空襲が行なわれ、農家の馬車が令状によって、徴用にかり出されることが多くなった。主な仕事は道路作業の土運び、供出された農作物の運搬などでありました。運搬作業は、ほとんど夜間行なわれることが多く、たまたま敵機の爆弾投下がなされたときなど、たずなを投げ捨て、馬車をほうり出して、安全地帯にかけこんだこともありした。

飛行場建設作業にもよくかり出されました。兵隊に家で食事を作ってあげたりよく世話もさせられました。

このようにして、生活の不安を知りつつ、危険を感じながら戦争体制に協力させられました。

です。

私は日本教育を受けたので当時の日本軍国主義もわかります。いまふりかえてみると大変だったと思います。

もう戦争はいやだと妻の民真ともしみじみ語りあっています。

黄四郎氏談

私は一九四〇年（昭十五年）二十三歳のときに台湾から八重山へわたってきました。当時名蔵一帯 まだ未開墾地が多く私は独身の身体を思いきり開墾にうちこみました。

一帯の農耕地はほとんど社有地で、主にイモ、陸稲、バナナなどを栽培しました。島の人々はマラリアが蔓延するとほとんどが開墾地を離れ、残ったのはほとんど台湾人でした。私は、ほとんど開墾地を続けました。ところが八重山も戦争の準備であわただしくなりました。私の生活も戦争の波にしだいに影響されてきました。働き手の多くが毎日のように徴用にかり出され、重労働の毎日が続き、食糧もだんだん少なくなってきました。私はひどく疲れてきて、いくどとなくマラリアに悩まされました。マラリアと戦いながら山林をきり開いて作った農作物もほとんど軍に供出されることが多かった。また徴用に出ているときによく農作物が盗まれることもありました。たいへんくやししい思いをしました。でも戦争ですし、台湾人とまたしからはしないかと思ひ、怒りをおさえていました。戦争は人々を苦しめるものです。二度と戦争はしてはなりません。

## 十、切り倒される福木

石垣町字石垣 宮 里 英 友 (五四歳)

屋敷にある防風林用の福木も軍は「供出」ということで切り倒して持ち去りました。最初、軍と係官が各家庭をまわり、立ち木の皮を一部分はぎとり番号を次々とつけ、後からその番号のついたものを兵隊が切り倒していきました。私の屋敷からも大きい福木を五、六本倒して持ち去りました。番号をつけたものの中に倒し忘れたものがありますが、その皮をけずりとった部分は腐ってしまい、今もその傷あとが残っています。又、その福木の皮は染料としてもはぎとりました。飛行機を偽装するためのボロぎれなどを染めていました。字新川などは相当はぎとられた家庭があります。それから山に兵舎をつくるという口実で、学校の校舎もくずれられてしまいました。一部は山まで運んだようですが、ほとんど薪にされてしまいました。御飯を炊いたり風呂をわかしたりするために立派なイヌマキなどをくべていましたし、机、腰掛などもほとんど薪にされました。それで戦後は勉強するにも支障をきたしたわけです。

軍隊は終戦後のことなど全く考えていませんでしたし、あと一か月も戦争が長びいておれば、町は日本軍の手で焼きはらわれ、住民は食糧確保のため殺されていたであろうという噂もありました。そのような秘密会議には地元出身の隊長（高良鉄夫氏）などは除外されていたということです。軍は長期戦に備え、食糧をおもと山頂に運ばせ、ふもと（底原）において兵隊自ら稲作をするなど、どこまで

戦うつもりだったのか今考えるとゾッとします。

私は敗戦をま近かにして馬車ごと召集され石垣国民学校に陣どっていた野戦病院に配属されました。主な仕事は移転のために畳や薬品などを運ぶことでした。畳などは住民を山へ避難させた後の空家から勝手にかつぎだしたもので、大浜孫伴氏宅に百畳余りも集めてあって、それを夜間に馬車に乗ることも許されないので手づなをひいて開南まで往復しました。そこからまた、おもとへ移転ということで更にそれらの畳をおもとまで運びました。

供出ということで持ち去ったものに屋敷を囲った石垣があります。とられた家庭は字大川に多いのですが、その石垣の石は道階補修に使われています。それから老人には黒ツグによる細の供出が課せられました。私は豚を一頭だけ養っていましたが、いよいよ山へ避難するというので、やむなく殺して肉をもって行くことにしました。ところが殺したその日に軍から豚の供出にきました。殺した豚をわたすわけにもいかず、だからといってかわりの豚をさがすこともできず非常に困ってしまいました。幸い豚の供出にきた者が地元の人でしたから何とかその場はごまかしたような記憶がありますが、それが軍に知られていたら本当にひどいめにあわされていたと思います。このように家畜の供出についても何の相談もなくすぐ取りあげられてしまわれる状態で、田畑で使用している牛や馬をその場からとりあげられた例もあります。軍の命令がすべてをきめてしまう時代でしたから。

## 十一、三〇年間育てた「キヤージギ」（いぬまき）強奪される

竹富村字竹富 前新加 太郎 (三八歳)

竹富島では、軍の防空壕のささえ木、大石部隊の港構築（西海岸の砂浜を掘り、暴風林の中まで水路港にしようという計画）のために、木材の供出が行なわれた。竹富島では、お獄の木を伐ることはタブーになっているがそのお獄のみごとな、ふく木も切り倒され、今度には住民の長期間心をとめて育成した最高の建築資材「キヤージギ」を強奪した。私のもの約八〇本、有田家のもの、約二〇〇本。それらは三〇年木で直径約三〇センチ高さ約七、八メートルもある立派なものばかりだった。木材を供出したということで軍から「感謝状」を受けた有田のじいさんは、「これはただの紙切れではないか、三〇年間の苦勞をどうしてくれる」といかりで体をふるわせ、泣いていた。

## 十二、学校をこわして「水肥桶」を作り販売

竹富村字竹富 前 新 太 加 郎 (三八歳)

軍は、由布島で自治班をつくるために、学校をこわして、資材を運んだ。戦後も学校の床板をはがして、「水肥桶」を作って販売し

ていた。当時の校長桃原用永（前石垣市長）と私は、隊長に「今後絶対に学校をこわしてはいけない」と強く抗議し学校こわしをやめさせた。

## 十三、豚を殺して「縄ない」の罰を受ける

竹富村字竹富 前 新 と よ (三八歳)

豚は軍の許可なくして勝手に殺すことは禁じられていた。しかし空襲がはげしくなり、食糧も無くなってきたので、あちこちで軍にかくれて屠殺し、由布への避難にそなえて塩づけなどしておいた。

私の父は「自分の養った豚は自分のものだ。戦争が来て、どうせ皆死ぬのだから早めに殺してしまおう」ということで豚を殺した。ところがそのことが軍に知られ、呼び出しがあった。しかし父は呼び出しに応せず、母を出頭させた。母はさんざんあぶらをしばらくたあげく一日中「縄ない」の罰をうけた。（縄は偽装用に使用していた。）

## 十四、まじめに勤めて

石垣町字石垣 大 浜 嘉 市 (三六歳)

一九四四年（昭和一九年）十月頃のことです。当時は、警防団が

組織され、各地区に警防団の活動が強化されていきました。私も団の責任者の一人として交代で詰所に詰めていました。警察からの指令で、灯火管制はきびしく白衣など目だつ服装で通行することも禁止されていて、それらを取り止めることも私たちの任務として命じられていました。ある日のこと、ひとりの男が夜十時頃白地の浴衣姿で下駄をはき近くの料亭から出て、私たちの詰所の前を通りかかったので、私は即座に「白地など目だつ服装で歩くことは禁じられていますから帰って着がえるように」と注意しました。

すると、その男はすなおに引き返しました。後で聞くと、その男は憲兵隊長だったので。詰所の家主である吉見さんは、私に勇気があつていいなあなどと話していましたが、私は彼が憲兵だと、ましてや隊長だとはつい知らず、注意したわけです。翌日、その昨夜の男が、憲兵服に身をかため部下ひとりを連れて詰所に現われてきたのです。そして、「昨夜、僕に注意した者はいるか」と言うので、「はい私です」と答えると、一緒にいた者もついて来いというので、吉見さんと二人ついて行きました。吉見さんは、昨夜のことで、きつと褒められるだろうなどとこそ、話しつつ、今の琉球銀行の向いの憲兵詰所について行きました。ところがそこで、意識を失う程に殴られたのです。憲兵の言い分は、憲兵さえも知らないのに、誰がそんな命令をだしたかということ、その夜、憲兵の友人が警防団詰所で上衣を脱いで白いシャツのままだったのに、彼には注意をせずに自分だけにしたということらしい。私たちの言い分には全然耳をかそうとせず、一方的に私に暴行を加えるのです。吉見さんには「貴様のあの時の態度はなにか」ということで同

じく暴行を加えたのです。

仕事の怠慢で暴行されるなら耐えられます。が、仕事を忠実にやっつて殴られるということがありますのか、日本兵が、いかにもの分りがわるく、一方的高圧的で、住民をも敵視していたかの証左です。その後は馬鹿らしくて、殆んど警防団の仕事はしませんでした。

## 第五章 強いられる生活苦

### 一、西表島炭坑夫の生活

竹富村字西表

藤原 茂・吉沢 又蔵―当時、炭坑下請経営者  
大井兼 雄・斉藤 幸吉―当時、丸三炭坑夫  
那根 武―当時、マリアリア防遏西表島事務所勤務

仲立氏は船浮部落で農業を営み、炭坑へ野菜、イモなどを売るため、よく出入りをしていました。

西表島炭坑は、明治初年以來、事業が営なまれましたが、経営が思わしくないので、つきつきと経営者がかわりました。

大正時代には、沖繩炭坑、琉球炭坑、先島炭坑が炭坑経営を軌道にのせました。

昭和十一年に、丸三鉱業所、星岡鉱業所、謝景鉱業所が合併して南海炭坑株式会社を設立し、昭和十七年まで炭坑は、活気があり盛んでしたが、坑夫は、苛酷な労働とみじめな生活を強いられ、筆舌に絶するものでした。

昭和十八年ころから戦争のため、海上輸送が困難になり、炭坑は自然廃坑への道をたどり、坑夫は、日本軍に徴用でかりだされ、連日、防空壕掘りの作業を強いられました。

戦後は、食糧難とマリアリアに苦しめられ、多くの坑夫が亡くなり、残った坑夫もバラバラになり、そのゆくえは、もう知りません。

藤原氏は、昭和十一年に九州の筑豊炭坑から、坑夫四〇名ほどつれて西表島炭坑に働きに来ました。

当時、南海炭坑株式会社のもとに、丸三鉱業所、星岡鉱業所、謝景鉱業所があり、そのもとに下請負者が数多くおりました。

一下請負者のもとに、坑夫は、三〇〜四〇名ほどで、坑夫の多くは、本土、沖繩本島、宮古、台湾の方々でありました。

ほとんどの坑夫は、炭坑の募集人にだまされて来ました。

「西表島は、一年中暖かく、着物はいらぬ、冬でも裸でおられる。おまけに、女はたくさんいるし、パインはたくさんあるから勝手に食べられる。バナナは、窓から手をだせばいくらでもとって食べられる。金もうけはいいし、こんなところははない」という言葉にのせられ、酒を飲まされ、支度金三円借りて、西表島に連れてこられました。

西表島にやってきたら、前の約束とは全くちがうので、だまされたことがすぐわかりました。

「バナナはあっても主がおり、一本も食べられないし、パインはアダンの実をいうし、おまけに、女は一人もおらない。がっかりしました。」

おまけに、西表島に来るまでの旅費と一切の金は、全部借金となり、身動きのできないようにいつのまにかなっていました。」（大井氏証言）

炭坑の仕事は、朝は、午前五時から、夕方六時ころまでの十時間の強制的重労働でありました。

西表島炭坑の炭層は薄く、四つんばいで炭層のところまでいき、寝て、掘りだしてました。

初めに、石炭の周囲の岩石を掘り落とし、岩石を坑外に運びだし、そして、石炭を掘りだしていきました。

坑夫の中には、借金に追われて、夫婦で坑内で働かなければならぬ者も何組がありました。

夫婦で働く坑夫は、夫が石炭を掘りだしたものを、妻はスラ（石炭を運ぶ箱）でトロッコのところまで運びだす仕事をしていました。（吉沢氏証言）

一日の採炭量は、一人当り二カン（一カン六〇〇〜八〇〇斤）掘りだすことが義務づけられ、働きの者は、それ以上掘りだしましたが逆に、二カンも掘りださぬ者もいました。

そのため、出炭の量により、賃金が異なり、一日、一人当り平均して、一円八〇銭（当時、米一升五〇銭）ほどでありました。

賃金支払いは、月二回で、石炭を船積した後には、各炭坑が発行する「切符」（金券）を支払いました。（丸三炭坑では、一日越しに

賃金を切符で支払っていました)

切符は、一銭、五銭、十銭、二〇銭、五〇銭、そして、一円、五円、十円とありました。(丸三炭坑は、五〇銭切符まで)

賃金支払いの時には、炭坑の売店の掛や、これまでの借金はようしやなく差引かれた。また、賃金より、三〇銭は必ずツルハシ、ス Copp などの積立金として強制的に差引かれ、炭坑で使う用具は、全部個人もちでありました。(丸三炭坑では、売店から掛買いはできなく、一切切符を使うことになっていました。)

切符は、発行炭坑の売店のみ通用し、他の炭坑の売店では通用しませんでした。

坑夫は、切符で日常生活の用たしはできたが、時には、どうしても現金を必要とする者には、現金と交換してくれました。(但し丸三炭坑では、できなかった)。ただし、手数料をとられ、切符の額面より少なくしかもらえませんでした。船浮の仲立氏は、百円もっていき、二〇円しかもらえなかったと怒りをぶちまけていました。

丸三炭坑の坑夫は、炭坑の食堂で、朝は、二〇銭の食事、昼夜は四〇銭の定食を切符で買って食べていました。そのため、坑夫間の切符の貸し借りは、できませんでした。一日の賃金、一八〇銭で、積立金、食事代、ガス代(カンテラのカーバイト)、酒、タバコ代しかありませんでした。(大井氏証言)

この切符制度は、坑夫を炭坑にしばりつける管理制度でありました。

当時、炭坑で働けば、二度と帰えられないといわれており、坑夫の間には逃亡がたえませんでした。

用人棒の任務は、炭坑の治安維持と逃亡した坑夫の捜査であり、坑夫からたいへんこわがられていました。

丸三炭坑では、坑夫間のバクチ、ケンカはなかったが、白浜の炭坑では、たえない傷害、殺人もありました。

坑夫を悩ましたのは、病でありました。少々の風邪では仕事を休むことはできず、強制的に仕事をさせられました。坑夫の多くは、脚気にかかっており、十名中六〜八名ほどはカッケでありました。

(藤原氏証言)

傷を受けたら、働けるまで休ませたが少々の傷は、薬をぬると、急に仕事をさせました。但し、治療は無料でありました。(大井氏証言)

当時、炭坑でのマラリア患者はあまりいませんでした。マラリア防遏所の職員が定期的に巡回して来て、採血をおこない、マラリアの原虫保持者に投薬していました。(那根氏証言)

坑夫が、マラリアにかかったら、仕事を休ませ、薬扇(炭坑の診療所)から薬をもらって飲み、水で頭を冷す程の治療で、看病する人はいませんでした。

このような生活をくりかえすなかで、昭和十六〜十七年ころから、炭坑の坑夫にも、徴兵の召集令状が来て、軍隊へいった方もかなりおりました、自分にもくるかと思っていました。きませんでした。(大井氏証言)

昭和十九年には、坑夫は自分の仕事どころか毎日、日本軍の壕掘りのために徴用でかりだされました。白浜の方の炭坑は、内陸、外離へ、丸三炭坑の者は、石垣島の開南あたりで、毎日壕掘、一年余

そのため、経営者は、坑夫の日常生活に不自由をきたさないように、炭坑の売店には数多くの品物をそろえており、困っている坑夫には掛買いやせ、または、証文入り、前借りをさせました。だが、賃金支払いの時は、もんくなしに差引ききました。(藤原氏証言)

坑夫は、重労働から解放されたい、不自由な生活から、自由な生活をしたという気持ちで逃亡する者は、月に三〜四名はいました。

(大井、斉藤氏証言)

逃亡する者は、ほとんどつかまって、つれもどされました。だが中には、台湾経路で無事に逃げた者もおります。(仲立氏証言)

また、丸三炭坑から無事に逃げた者で、当時、十六歳の者が、カマス袋に入り、荷物にみせかけ、前もって積んでおいた人に船に積みこんでもらい、逃げました。(大井氏証言)

西表の山中をさまよい、餓死した者もおります。当時山中に白骨をよくみかけました。(仲立氏証言)

坑夫の逃亡を防ぐため、丸三炭坑では、坑夫の合宿所(二人一室の長屋)を外から金網をめぐらしてあり、そして、用人棒がいつも監視していました。(大井、斉藤氏証言)

各炭坑は、石垣、宮古、那覇に連絡事務所を設けていました。この事務所は、坑夫の募集と逃亡者の捜査の仕事を主としておりました。逃亡者のほとんどが、連絡事務所でつかまるか、各炭坑の用人棒(人ゴリとも呼ぶ)によってつかまりました。逃亡した者がつかまったら、半殺しまでの制裁を加えていました。いつも炊事当番をしていた者が、逃げてつかまり、事務所でさんざん体罰を加えられ殺されました。(大井、斉藤氏証言)

り、そこで使われました。(大井氏証言)

大島沖で湖南丸が敵の機雷で沈没したとの情報が入り、すでにこの時分から、海上輸送は、完全にストップし、石炭輸送はできなくなっていました。そのため、炭坑は、自然閉鎖となり、坑夫は自由解散となりました。(藤原氏証言)

海の輸送のストップと毎日の徴用での壕掘りが続くなかで食事の量が少なくなり、いつもひどい思いをしていました。

昭和二十年になると敵機の波状攻撃が激しくなり、軍命令により、軍指定地、仲良川河口の山と二番川一帯に避難しました。

四月二日に白浜部落民が避難地で、避難小屋をつくっている最中に、敵機の来襲で部落の家が全焼してしまいました。そのため、家具をなにも持ちださない者もいました。

避難所では、すでに、食糧は不足し、ほとんどの者がやせおとろえていました。食糧難のみならず、マラリアが猛威をふるい、たいへんなものでした。

終戦になって、食糧がないので、食糧さがす者の姿がよくみかけられました。とにかく、食べられるものはなんでも食べました。特にスヌル(モズク)、ソテツは多く食べました。栄養失調のうえに、マラリアにまでかかるとそれこそたいへんなものでした。医者はおらず、薬もなく、ヨモギの汁を飲ませ、一時の熱さましと、水を頭を冷すほどの治療でありました。

そのため、多くの者が栄養失調とマラリアのために亡くなりました。

終戦後、坑夫は、自分の思い思いのところへいってしまいまし

た。(藤原氏証言)

## 二、宇多良炭坑の生活

竹富村字西表 君 島 茂(元坑夫)

(1)西表島に来た背景

私が福島から西表に来たのは三五歳の時でした。

私は、社民党員ではあるが、早くから社会運動に参加した。自らの手で労働組合をつくったり、分会長を務めながら、一般産業労働組合の中央執行委員もやっていた。私たちの労組はアナキスト系の人が多く、九州から代議士に出た今村均さんとは古くからのつき合いであり、農民組合の平野さん、松谷さんなんかとは選挙運動も一緒にやっていた。社民党時代は、阿部磯雄の系統をずっとやっていたが、賀川豊彦の社会キリスト教民主主義にひかれ、賀川さんと一緒にやっていた、教会の牧師を務めながら協同組合に尽力していた。

大江さんには随分と教えられた。一時は、中央で食うか食わずかで動けるだけ動いた。しかし、正直な話、一貫した思想をもっていた訳ではなかった。社民党にいて、アナキストの労組に入ってしまったって抜きさしならぬ状態にあり、思想的にも混乱していた。それじゃ仕様がなから、困社党にも入った。

そのようにみんな上手によく泳いできた訳だけれども、私が一步

坑は本坑の他に浦内、上原等六ないし、七ぐらいあって、うち三〜四が当時採炭されており、それらの坑がとりつくされれば他の坑に移る、という仕組になっていた。

結局三〜四の常時採炭している坑と二〜三の予備坑をいつでももっていたのだ。当時は一トンの産炭に対し、二八円の補助金があり、この補助金で大体掘れた。

賃金は、坑夫募集の際には、日当五円ということであったが、実際は四二銭というべらぼうな安い賃金で、長らく昭和十五年まで働かされた。石炭の質は、六八〇〇〜七二〇〇カロリーの熱量があったのだから、日本でも優秀な石炭だったろうが、層が薄い。一番厚い所で一尺八寸、薄い所で六寸、その上、日本の炭坑が全般的にそうなんだが、特に西表の場合は、断層が多い。薄くて断層のある所に当たった人は、それこそ大変で生きた心地はなかった。当時は今日のようにボーリング機がある訳でもなし、すべてが手掘りなんだ。

炭層が切れば、その炭層は上にいっているのだろうか、下だろうかかと協議する。下だと判断すると、もう処置なし、上だということになれば、またどこからか掘り出して探して探して探して。一日の産炭割当量は、入坑前にちゃんと言いわたされる。その割当量の生産ができなければ、夜中になっても坑から引き上げることは許されず、坑外では監督が眼をひからせてどなりつける。一日の割当量を掘りだすために、その日の坑内労働から一刻も早く解放されるために我身に鞭打って殆んど休むこともなく一心に働いた。夕方ともなれば極度の疲労と空腹で耐えられなかった、そこへもって、割当量に達せず、監督にどなられる場合には、目の前が真暗になり、泣

外にできればで、特高が尾行し、電車に乗れば乗るで、降りるときには、ホームにはちゃんと特高が立っていた。

こうして、今度は転向を迫る。このように上下を着せられて全く身動きのとれない大変な状態だった。もはや生きた心地はなかった。留置場なんかには一年に何回入れられたかわからない。その上、家庭的な事情も加って、全く一人ぼっちになっていて、寝ても覚めてもいいことはなかった。刑務所へ行くには勇気と信念が必要であった。刑務所へ行った連中は殆んど殺されている。あの連中は澄んでほんとに清い人たちだった。今にして思うとほんとにえらい、つくづくうらやましく思う。徳球さんたちの如き大ものならともかく、中途半端の者は大概殺されている。俺なんかもきつと殺されていたに違いない。時の官憲は中途半端の者なんか人間とは思っていないかった。そういうとき、神戸で西表炭坑からの求人があった。日当五円ということだった。

当時五円といえば、目玉が飛びでる程の大金だった。何しろ米一升が三〇銭だったのだから。西表に来て初めて、特高の追跡がなくなった。ところが憲兵だけは「君はどここの大学をでたか」とときく「冗談じゃない、俺は小学校卒だよ」と言ったら「珍らしいな、分らない」と言っていた。

南海炭坑になってからは、産炭量、坑夫の数からみても野田さんの所が一番大きかった。記憶に違いがあるかも知れないが、確か最高日産が一八〇〇トンであった。坑夫は約三〇〇人のうち、一〇〇幾十人が本土の人、一五〇人ぐらいが台湾人、残りが沖繩の人で、確か朝鮮人も二人いた、地元八重山の人はいなかった。

きだしそうになるのだった。割当量の生産がどうしても不可能だということを経験自身は認めるときには「仕方がないから、はい、あがれ」といって、ひきあげさせた。

住いは、低くはあったが、大分改善されて畳も敷かれ、三畳に二〜三人が割当てられた。そして、ガラス窓で採光の面でも比較的よく、その外側からは蚊の入らないような金網が張りめぐらされていた。こうした施設は外見的には、採光がよく、衛生的で蚊の侵入を防止するものであるかのようだが、その実は、蚊帳をつらせず、ガラス窓であることによって、坑夫の動態が夜中にも監視にわかる仕組になっていたのである。

炭坑の売店には、食糧をはじめ衣類、その他の品々が沢山あった。食事にだされるものはまずくはなかったが、人間の食生活は毎日だが、そう単調なものであってはいけな。サシミを見ればそれが欲しくなるし、山シシを見れば、またそれが欲しくなる。眼がみれば胃袋が満足しない。しかし、賃金はわずかに四二銭でしかない。しかたがないから借借書をいれてサシミあるいは山シシ、酒、たばこ、下着類にいたるまで購入する。すると今度は、また、それだけ分借金が重くなり、身動きがとれなくなっていく。炭坑では、現金の使用は認められず、各坑業所が発行したチケットが現金に代ってその機能を果たしていた。そのチケットは西表の部落内でも通用していたが、坑夫が現金を持ってないということが、西表から逃亡する上の足かせともなっていた。

朝未明、五時には朝食を取り、六時には作業につく、そして一日の割当高を掘りだすため夜に至るまで、骨身を砕くような毎日の重

労働、それに休みと言っても、公休日ぐらゐのものであった。未明に炭坑に行き、夜疲れた重い足を引っぱって小屋に帰るといふ単調な生活であった。外出も許可制で、願ひでもその半分許可になればましの方であった。皆娯楽にうえていた。無声の映画が定期的にあるぐらゐで、娯楽らしいものもなく、そうした施設も全くなかった。結局酒と花札が唯一の娯楽であった。酒をくみ交して相互に激励し、慰め合った。そしてたまには会社についての批判もでたが、それが会社の耳に入ったときは処置なしで大変な折かんをうけた。映画は、十・十空襲で那覇が焼けるまで、無声ではあったが続けられた。

劇場は、宇多良部落内に設けられた瓦ぶきのすばらしい建物で、演劇もできるように舞台も設けられていた。料金は無料で部落民にも開放されていたので、その日は、坑夫は勿論多数の部落民も参観した。無料なので、劇の方は古木さんが説明にあたり、ニュースには私があたった。売店には本も売っていたが、週報とか、サンデー毎日の如き週刊誌、月刊物としてはキング、富士等講談社のものばかりであつて、読書範囲も極く限定されていたのである。

三〇〇人余の坑夫の中には婦人もいた。婦人は、真面目で住み込みに適しているということで、会社側から歓迎された。婦人が炭坑に入ると大体すぐ以前からそこに働いている坑夫と結婚した。安定した労働力が得られるということで会社側もこれを歓迎した。

こうして世帯もちができるのと彼らはそれなりの別の小屋があてがわれた。そして幾世帯かで一組を編成し、幾組かで更に一班を形成する仕組になつていて、相互に尾行監視をするという江戸時代の五

かに埋葬してしまふので、問題になることもなかった。私は叩かれる現場をみた訳ではないんだが、坑夫が死んだということで葬式があった。その時、仲間の間では、おかしいなということが口々に言われていた。その後、警官が来て「近頃おかしなことがなかったか」と尋ねていた。一人として口を割る者はいなかったが、埋葬した者を掘りおこし、医者に解剖させた結果は、まぎれもなく撲殺であることが判明し、犯人は警察に引っぱられていった。しかし、そのことを誰がばらしたかは遂に分らなかつた。誰だと言うことが知られれば、次はまたその人が同じ運命をたどるからである。

供養は欠かさずにやった。坑夫らは、仲間意識から心をこめてやったが、親方自身も積極的であった。戦争中は特にそうで、はるばる石垣から本願寺の藤井という坊さんを招いて厳かに供養をしたこともあつた。

逃亡者に対する西表部落民の感情は同情的であつた。警察や監視人に見つかつては大変だということで、サバネに乗せて人目とどかない安全地帯に避難をさせ、危険が過ぎれば、人手が足りない時とて、連れてきて田畑の手伝いをさせ、危険が到来すると、また、船賃、食費、小使い等を与えて逃がしていたという。しかし、こうして部落民の手厚い保護やあるいは搜索陣に対する非協力の甲斐も空しく、大方は捕まつて連行され、ひどい折檻をうけたわけだ。

会社と警察、憲兵との癒着は目にあまるものがあった。時折、警官がその地域の警邏に来るのだが、彼らは自分の任務を果たそうとせず、館にさつさと上がり、座敷に坐りこんで、この酒、あの酒と酒の品々を飲み、だされる珍しい御馳走を心ゆくまでたいらげて

人組の制度にも似たような制度がとられていた。そのうち、子供ができ学令期に達すると、宇多良の劇場に私立の小学校を設け、小学校の三年まで教育し、以後は遙か遠くの祖納の小学校に通わせた。

前に述べたように、朝未明から始まる体力の限界を越える非人間的な過重労働、年休、病休はなく、住居と坑を往來する毎日の単調な生活、休みたいときに休む自由はなく、食べたいものを食べ、着るものを買えば、それだけ増える借金、外出の自由はなく、相互に張りめぐられた尾行監視制度、現金は与えられず、娯楽もないという坑夫の生活は、とてもこの世の人間の生活とは思われない、息苦しいものであつた。中には、こうした非人間的な生活から脱するため逃亡する者もでてきた。しかし、こうした企ても空しく、すべて不成功に終つた。西表島の各部落及び各離島には監視人が配置されておき、彼らと警察が手をとつて連絡を合し、搜索に當つたのだ。炭坑からの脱出人は、よそ者である上に、日光に當ることがないだけに、気肌は地元人とは違って、青白かつた。また、服装も独得で、一目瞭然であつた。彼らは監視網をぐぐり抜けることはできず、たちまち、監視人や警官の手によつて連れもどされた。連れもどされた坑夫は、コンクリートの上に膝まずきさせられ、親方の信をうけた部下、いわゆる、幹部級の人たちによつて棒で叩かれる。気絶すれば水をぶっかけては、また叩くで、もう話にならん。言葉ではない表わせないひどい折檻をうけた。時には折檻が過ぎて無惨にも死に至らしめたこともあつたという。

医者が来て診断してくればいけれども、そんなこともしてもらえず、ただ、〇〇病気で死んだという診断書ももらつて来て、秘赤ら顔で、ここから直接帰るための船へと急ぐのであつた。帰る際には背負いきれない程のお土産を貰ひ、親方らに船まで見送られるのだつた。憲兵が来た場合も同様であつた。そういう関係で、炭坑一帯についての諸々のとりしまりやとり調べ等自らの責務に対しては忠実でなく放棄したものに等しかつた。

盛時には、一鉱業所で三〇〇人位の坑夫を擁していた西表の石炭業も、戦争が日本に不利になり、航海が危険になつてきた昭和十八年ともなると、南海汽船定期船が以前のように人らなくなつて、石炭業も振わなくなつた。

確か那覇の十・十空襲あたりまでは細々と探炭していたように思う。軍作業に駆りだされた頃からは石炭掘りはなかつた。ただ時折石炭積載に来る船に、貯炭されたものから、男女が行つて積んでやるぐらゐのものであつた。

### 三、台湾人炭坑労働者の生活

竹富町字西表 揚 添 福 (四十歳)

私が台湾から西表島に渡つてきたのは昭和十二年で、唯一人の台湾人苦力頭でありました。最初に行つた所は、白浜の南の離れ小島の一角、南風坂で、そこに約六か月働き、後、台湾人炭坑労働者の募集に台湾に行きました。以後、昭和十八年探炭業が振わなくなるまで必要に応じて何回も行きました。

私が最初に世話した台湾人坑夫は六四人で以後は子どもをつれて

くる人もあって、多いときには、一度に一〇〇人をこえることもあった。そして結局、西表に台湾人労働者が最も多かったときには四〇〇人ないし五〇〇人が働いていました。大戦勃発後大方が引きあげたが、それにしても終戦時でも一〇〇人以上が残っていました。

台湾人労働者の船賃は、西表に来る場合は会社負担であったが、帰る場合には、一か年以上の勤続者に限って会社が負担し、それ以外は個人負担でありました。

私が来た当初、白浜は今日のように平担で家屋があった訳ではなく、山から海にすぐ崖をなしていました。私たちの作業もその埋立て工事からはじまりました。

賃金は日当三円五〇銭で比較的恵まれてはいたが、監督の目は厳しく寸分の休む時間も与えられず、労働の苛酷さはこの上もなかった。その上、落盤、その他身の危険にさらされることが多かった。

当時の西表島における石炭業は、南海鉱業株式会社の下に丸三、星岡、謝景の三鉱業所があり、その下に更に幾つかの下請けがあった。坑には、その下請業者、あるいはその地域の名称がつけられていました。私が働いていた南風坂の炭坑には、二〇〇人ぐらいの坑夫がいたが、三分の二が台湾人でありました。

石炭の層が薄いので立っての仕事というのは殆んど不可能で、腹ばい、あるいは横になりして、うす灯りを頼りに、先ず、石炭の回りの土や岩石をとりのけ、それをトロッコに積んで外に運び出し、それから石炭を掘りだす。そういう仕事のくり返しであったため、一日一人で一トンを掘りだすということは到底できるものではなかった。夫婦一緒に組んでやった台湾人坑夫だけがかるうじてなしと

は、ともかく続けられました。しかし、十八年ともなると、敵潜水艦の出没によって、海上が不安になって、週一回の沖繩本島や台湾からの定期船や石炭運搬船の入港が減少したため、採掘した石炭の搬出が困難となりました。そのため、採掘した石炭が処々に山をなして放置され、相対的に石炭が生産過剰となった状態でした。その石炭の山は終戦に至るまでも所々に放置されたままでありました。

そこで、会社が石炭生産の縮小、あるいは中止の挙にため、いきおい、多数の坑夫が失職し、食生活にも事欠くようになりました。戦争の激化はこのように、この辺地の小島の一坑夫の生活にも深刻な影響を与えたのです。自然失業した坑夫は、全部軍作業に駆り出されました。軍作業は大別すると二つに分けられます。一つは軍隊のための食糧生産、他は道路づくり、壕掘り、その他の陣地構築でありました。いずれも、二十年八月十五日日本が降参するまで続けられました。

陣地構築作業は外離で、海岸から、はい上るような山頂に道路をつくったり、その道路の両側の所々に防空壕を掘ったり、山頂で大砲をすえるための穴掘りをしたりしました。一人として部落に居残ることは許されず、軍命によって全員が強制的に駆りだされました。食糧は不足、腹一杯めしを食うこともできず、人々は栄養失調になって、これらの仕事は大変な過重な労働でありました。特に、二十年以降は敵機の爆撃を恐れ、朝未明に舟をこいで外離に渡り、夕暮れに及ぶ、十余時間の毎日の重労働で、体力を完全に消耗し、疲弊していました。

私は相当の田畑や農具ももっていたので、兵隊二人が家に住み込

げていたのでありました。住いは至って貧弱で、坑ごとに矩形の細長い茅ぶきの埋たて小屋で、その中に、出身地別にグループ単位に住んでいました。衣服や食糧は比較的自由に購入できたが、現金の使用は許されず、鉱業所単位にチケットが発行され、それが貨幣の役目を果たしていました。

親方からの賃金の前借りや売店での掛け買いもできるので、坑夫は病気になる時などそれらをよく利用しました。ところが次の給料日が大変だったんです。給料から前借りの元利金、売店の品物の代金が一べんで棒引きされ、それだけでは到底生活できなくなる。

仕方なくまた前借り、棒引きの悪循環で働いても働いても大きくするのは借金ばかりで、それに耐えきれず、逃亡する者も出てきました。また逃亡するしかなかった。だから、逃亡させないようにすることが労働管理の第一の条件で、坑夫の要求に応じて幾らでも前借りさせた。

逃げた者はたちまち捕えられ、見るに忍びない程の残忍な折檻をうけ、以前にもまして激しい労働を強制された。また、罰として逃げた分だけ、賃金から差し引いた。反面、捕えられて連れ戻された後、一生懸命に働らく者には寛大な取り扱いがなされました。

日当が二円五〇銭だったのは、私の配下の埋立工事に従事していた台湾人坑夫だけで、他は、藤原さんの如き長年の勤務者でも、最高が一円五〇銭であった。

私の配下には、通訳が一人、事務員が二人、苦力が百余人いて、一人は、常時食糧の準備に当たっていました。

採炭業はかつての盛期の活況はうせたとはいえ、昭和十七年まで

み、常時四、五人の部落民を強制動員して、軍隊のために食糧の増産に当らされた。いくらつくっても、大部分が兵隊に徴発され、自家用としてはいくらか残らなかった。私の場合は、恵まれていた方だったが、他の坑夫たちは、配給は殆んどなく、抛出は多く、仕事はきつく、いつも空腹でみじめであった。私は「安東丸」が漂流してきたとき、それに積載してあった豆カスを軍から貰うけ、肥料として使用し、食糧に事欠くことはなかった。

また、昭和十九年頃白浜には慰安所がありました。その慰安婦は一〇人位だったが、台湾、朝鮮、沖繩の方から来ており、中でも朝鮮人が多かった。美ぼうの者は、憲兵や上官の者がわがものにしていった。確か空襲の始まった頃までもおったように覚えていたが彼女たちが、どうなったかは全く知りません。

戦争中までは不十分とはいえ、まだ食糧生産も何とか行っていた。その上軍からのマリアナの葉もあって、マリアナの猪けつはさ程ではなかった。しかし、戦後は一パンにそれが爆発したように、マリアナの猪けつに苦しめられました。中には餓死する者もあったが、多くの人々が餓死寸前にあって、体力は極度に弱り、体の抵抗力を完全に失っていた所へマリアナの猛威となったのであろう。どの家にも多くの死人が出た。

台湾人の生活もみじめであった。極度の栄養失調とマリアナで死亡する者が続出した。食べる物はないし、仕事もない。またできもない。着る物もない。生命をつなぐには盗みを働く以外に道はなかったのです。しかし、台湾人の私らがいるので、さすが西表西部で盗みを働くことができず、数人の者が東部の古見部落にわたり、

部落民の牛を盗み、屠殺したことが発覚されて捕えられ、強制送還されたこともありました。戦後は、台湾との定期船はなく、故里へ引きあげるにも引き上げることができず、思い通りに白浜から姿を消し、今わたたくしなどが生き残っているという実状になっています。異国の土地で戦争と低賃金で、いじめ苦しめられた同僚のことを思うと目がしらがあつくなり、戦争の罪深さをいやというほど知られます。

こういう時代は二度ときてほしくありません。いや、二度とこういう時代をつくってはならないと思います。

#### 四、船浮部落の強制移住

竹富村字西表 漢 那 恒 宣 (二三歳)

わたしは祖納部落で、軍に徴用され働いていたが、妻のナエから部落常会で、船浮住民は大原に移住するようになったから来いという連絡をうけ、軍にその旨を話して、船浮に帰った。

船浮に帰ると、大原へ行くまでの十五日間は、軍の奉仕に出され船から降ろされた魚雷を、クイヌ浜の倉庫に運んだ。戦争に勝つためには一生懸命であった。

##### △大原移住

わたしたち夫婦は大原に行くことになったが、両親と三人の弟妹、甥、姪は祖納に行った。これは、部落常会で大原に行くよう話し合われたことが、各家族で意見がまとまらなかったためである。

ここには永住するつもりはない。必ず郷里の船浮に帰える、また帰えれると確信していた。わたしがこのようなことをもらしたことが開発事務所に伝わり、いろいろと嫌がらせや圧力がかかり、自分で作った米も食べてはいけないという事であった。

わたしは少し分抵抗し、談判もした。しかし牛、馬、豚などの家畜が逃げると、開発事務所の人につかまえられ、とられてしまう。そんなひどいこともしたのだった。

第一回目の空襲は、四月三日、波照間山神社（御嶽を当時そう呼んだ）の祝いで、午前十時ごろであった。お祝いに行く前でよかったが、祝いの最中だったら、死者が多くでたことであろう。ほんとうに運がよかったと思う。はじめは児童生徒を先に行かせることになっていたのだから。

爆撃は、飛行機十四機で、爆弾は三十四発も落ちた。神社はめちやくちやにやられ、豚六頭、馬四頭、牛二頭が殺され、馬小屋一棟全焼の被害をうけた。

この日は、住家の全壊はなかったが、わたしの家には、機銃の被害で柱が一本折れそうになっていた。機銃掃射が大変だった。シンメー鍋（大鍋）に弾のあとが七発、五升炊きの鍋には、五発もあった。よくも人間に当らずに、死なずにすんだと思った。

二回目の空襲は、三十四機も来た。そのときも大変だった。その後、部落民は山に避難した。船浮から来た人たちは、ヤッサ（地名）の山奥に、みなが住めるように共同で小屋を作って避難した。日がたつにしたがって、食糧もなくなってきた。他の人たちは、

○大原へ行った家族

漢那恒宣、船浮武一郎、戸真伊常、井上繁、山崎国秀、宮城加那

○祖納へ行った家族

漢那恒好、仲立孫治、村山信智、西村孫夫

○干立へ行った家族

嘉目英光

○部落に残った家族

池田稔

残り台湾へ行ったが、その数ははっきりしない。

大原移動に際し、大原から数人の代表がきて、部落会長、山崎用秀氏宅で、話し合いをもった。ここでは、大原はたいへん立派な部落で、土地も肥えている。芋は掘らないでも足でけつたら出てくると宣伝していた。

引越しは、ダンベ（曳船の一種）で行ったので、家財道具は運ぶことができた。

大原に行ってみると、本当にしゃくにさわった。たまされたことがわかった。

家はアナブリーヤ（掘立小屋）で茅ぶき。戸も茅でつくられており、七、八尺もあるので、重くて女や子供では開閉できない。それで怒って、塚越開発事務所長のところに談判に行き、やっと瓦ぶきの家に入れてもらった。

田は一反半を割り当てられ、十四俵の収穫だった。しかしその米は、終戦後まで食べることはできなかった。

開発事務所の人には横暴であった。わたしは大原に来た当初から、

わたしの米を持ってきて食べようと言ったが、わたしは絶対に取りに行かなかった。開発事務所は本当に野蠻だった。わたしは、どうしても郷里に帰りたいと思った。必ず帰えれると思っていたので、絶対に米に手をつけず、最後まで意地を通した。

いよいよ食糧もなくなった。それで部落の人々もばらばらになり、自分たちまかせになるよりほかはなかった。そこでわたしたち夫婦と、妻の父母家族、わたしたちが世話をしていたおばさんとは古見部落に行こうということになった。

わたしたちは、わずかの着物、毛布二枚が持ち物であった。昼食は、朝炊いた残りが少しあったので、子供だけに食べさせ、大人は食べるものがなかった。

古見に着いて区長さんの畑に行き、芋を十斤分けてもらった。たいへんありがたかった。もし古見で食糧が得られるなら、ここで避難生活をしようと思ったが、これも食糧難であった。

古見で一晩泊って、翌日すぐ逆もどりをしてその日の内に南風見田までようやくたどりついた。その晩はナイヌ浜のアダンの下で野宿した。一夜明けて二日がかりで二世帯が暮せる小屋をつくった。食糧はまったくきれアダンの実が主食であった。子供たちは食べられないと泣くし、本当にみじめであった。

さいわい、イノシシ用のわなの材料を義父が船浮から持ってきていたので、早速わなをかけに行った。三日たった第一回目のわなめぐりの時に、十四頭もとれた。そのあともよくとれたので、大変食糧にはたすかった。味つけは、ドラム缶で海水をたいてつくった塩だけだった。

## 五、網取部落の生活

竹富村字網取 東若久 和利 (五三歳)  
屋良部 亀 (四三歳)

南風見田に来て二、三か月で終戦になった。食糧はまったくないし、マラリアに悩まされ、大変な生活であった。  
終戦になったので、わたしは開発事務所に談判して、自分の米をとってきて食糧にした。十四俵あったのが、そのときは十二俵しかなかった。二俵はとられていた。そして、船浮に帰えるころには、食べつくして、三俵しか残らなかった。

引越しはまた大変だった。大原にあった物を、小伝馬船で南風見田のナイヌ浜に全部運び、ナイヌ浜からそれらをナオルの浜に運んだ。そこで板等を使い仮寝の宿をつくり、二晩泊った。そして二日ばかりでクイラ川の舟着場のところまで荷物を運んだ。マラリアで体力も衰え、山の中を谷をこえ、山こえて荷物を運ぶのだからたいへんだった。わたしが日に三回、妻が二回運ぶのが精いっぱいだった。タンスや臼等、家財道具を、木の間を分けて運ぶのはほんとうにたいへんだった。そしてクイラ川で一息をつき、一、二泊して舟を船浮部落にまわし、荷物を運ぶつもりでいた。

ところが、祖納部落に移住していた父が重体であると、弟が知らせて来たので、弟とその足で藁草を取りに大原まで行き、その晩は大原で泊り、そして翌日祖納に着いた。父が重体なので、妻を迎えに行くこともできなかった。

このような生活のあと、郷里の船浮部落に帰ってみると、家は床や戸もなく、修理がたいへんであった。そして、その後も戦後の食糧難の苦しい時代が近づいた。

### 一、避難前の生活

1 防空壕ほり 個人防空壕は六か所。自然のほら穴も二か所利用していた。

個人防空壕には、家財道具を入れていた。

### 二、避難所

1 第一避難所

集団防空壕は、一か所。うるち字のあいだの丘に、横穴を掘り、木材を組みたてた坑道式の壕で、三〇名位が入れるものであった。この壕は、七人程の人が二〇日位かかって作った。

2 第二避難所

部落から一キロメートル程離れた、うぶぬちに、一〇坪程のほったて小屋を作った。一五名程の男女が三日間で作った。

婦女子は、かやをかり、男は、材木や竹切り、部落共同作業で行った。

3 第三避難所

部落から一七〇メートル程離れた、かさしたという地名の場所、掘立て小屋三棟、合せて四〇坪程。一五名程が一〇日間で作った。実際に避難に使用したのは、第三避難小屋までであった。機械も一台運んで行ってあった。婦人の方は、実際に機織もしていた。

## 4 第四避難所

部落から一〇キロ程離れた、網取部落と崎山部落から等距離の山奥のびさんかーという地名の場所。両部落で使用するようにし、両部落共同で作った。一番難儀だったのは、かや運搬であった。あやんだ(地名)でかやをかり、婦人の方が八束か九束、男が一五束程たばねて運んだ。

同部落の嵩原徹氏は、部落に残ったわずかの年取った方だけで、よくそれだけの仕事ができたとびっくりしたと語っている。

## 三、竹富村の行政区分

行政区分は八区あり、仲良川から西の方、吉田原、船浮、網取、崎山の各部落がわたしたちの第八区であった。

当時昭和十五年三月三日から、東若久和利氏は、八区の区長を務めていた。

戸数は、だいたい吉田原一八戸、船浮一八戸、網取二一戸、崎山一三戸。

私は、区長の外に、米穀生産高調査員(十七年二月十五日任命) 豚籾委員(一九年四月一日任命)、竹富村農地委員(十六年三月十二日)十七年七月二十八日)、大政翼賛からの世話役(十七年十二月一日委嘱)等も務めた。

委員等の仕事のおおまかな内容。

### 1、米穀生産高調査員

各戸の米の収穫高を調査。家族数等を調査し、余分の米は、供出させる。

### 2、農地委員

## 第六章 戦時下の住民生活

### 一、避難生活

#### 1 白水での避難生活

白水への避難の対象は登野城と大川の両部落民である。

避難の類型を整理すると次のようになる。

第一避難―自宅の庭や裏の空地に防空壕を掘りそこへ避難する。

第二避難―部落郊外(部落後方か自分の畑小屋等)や藁。

第三避難—各字別、部落別に集団避難した。(大川、登野城は白水地区)

白水への避難の日程は、一九四五年(昭和二十年)六月二日、軍による避難命令によって始まる。避難命令は、「六月十日までに第三避難地区(白水)へすべての住民は避難を完了せよ」というものであった。しかし官庁、医者等は五日に、一般住民は六日に避難するよう内示があったようである。登野城、大川の住民は六日にほとんどの人々が避難を完了した。

その後白水の避難小屋での生活が続くが、同年の七月の中旬から下旬には下山(白水はオモト岳の南面にある)している。

#### 字大川二町内の一 班 宮 良 ミツ (二九歳)

六月二日に軍から避難命令がでて六日には避難しなければならなかったが、祖母が年老いているし、子供達がまだ幼いので徒歩避難は無理と思い馬車が借りられる七日に避難することにした。年老いた祖母(当時七五歳)と、子供三人(うち一人は第二避難小屋でマラリアにかかったまま)を馬車に乗せ、末の息子(当時二歳)は背負って深夜出発することにした。翌日の未明には白水に着きたいと思っただけです。

避難小屋は隣組で前もって作ってあったが、まだ完成しておらず床もできていない状態でありましたので、それができるまでは祖母を地べたにむしろを敷いてねかせた。

小屋は長屋造りで、五所帯が隣組の編成でこの避難小屋に入ることになっていましたが、何名かは、部落郊外にある自分の墓にかく

又屋間部落へ残ることも許されないし、兵隊がいつも部落内を巡廻していた。

白水と石垣間には三本の道路があった。

①チャール山をぬけていく道

②川良山をぬけていく道

③ノロミズをぬけていく道

避難中の食糧確保にはたいへん苦労したが、特に終戦後がひどい食糧難に見舞われた。私が白水からひきあげたのは七月二十二日であった。白水へ避難のために出発してから四十五日目にあたる。

#### 字大川四町内 石 垣 マイツ (三十歳)

私は六月六日の午後五時頃白水へ出発した。隣りの糸洲先生が軍のトラックを相談してあるので一緒に行くとうきそわれた。トラックは、バラビドウ入口に兵隊がいてそのものを借りてあるということであった。午前五時頃家を出たがバラビドウからトラックが出たのは七時三〇分頃であった。

東廻りをして名蔵の入口にさしかかかったとき空襲にあいトラックに乗っていた私たちは皆んな飛びおりて木立や岩のかけにかくれた。飛行機は東の方面からやってきて銃撃した。しばらくするとだんだんふえて十八機ほどになっていた。

この場所は原野で、身をかくすものといえはカヤだけで爆撃のあい間をみてはいずれ廻ってにげるといふありさまであった。自分の荷物もどこへいったのかさういふことを考えるゆとりもないほどであった。もうここで死ぬのかと思ひ必死ににげた。

れて白水にこない人々もいた。

屋根はカヤぶきで、そのカヤも私たちが崩りてふいたものである。勿論学校などというものはない。

便所もそれぞれ家族単位で穴を掘ってつくった。うじ虫がうようよしていたのが今でも目の前にちらつく。

避難した翌日祖母は過労のため、とうとう病が悪化して他界してしまつた。

思えば七十五歳の病人をたえずつきまとう空襲の脅威にさらさせながら深夜から明け方にかけての馬車の移動が死期を早めたのだと思ふ。

戦争さえなければこのような苦しみの中で祖母を死なさずにすんだのではないかとほんとうに残念でたまらない。

避難して落つく間もなく祖母の葬式をしなければならず、子供はマラリアの熱で苦しんでいる。夫もそのときは白保の部隊へ召集されていてそこでマラリアにかかりまだ快癒していないし、また祖父も五月の十八日に死亡したばかりで三週間しかならない。当時は埋葬なので祖父の死体をかたづけなければ祖母を葬むことは出来ない。といって白水に埋めておくわけにもいかず、しかたなく親族を集めて石垣(部落)へ運び葬った。

食糧は、昼は山中から出ることが出来ないで、夜間子供をおぶって部落にある畑にかよい、さつまいもを掘って明け方にそれを運搬するという毎日であった。

白水から石垣に出るには、川良山をぬけて行かねばならないが川良山には兵隊がいて午後五時以降でないで部落へ通してくれない。

その場所では子供も自分自身で自分の身を守るといふようにばらばらであった。しばらくにげてゆくと「イシムル」(石の多い森)があったので、そこにかくれているとき、第二回目の空襲にであった。子供をつれて、石のまわりを右往左往してようやく難をのがれた。

空襲がやんだので、先を急いだ。

「ウラース」(地名)のあたりに来たころ又第三回目の空襲にあった。そこは湿原で水田の中の一木道でかくれる場所もないので、そこにいた人々は一せいに道の下の暗渠にかくれた。水田の暗渠なので水が胸までくる。

それでもほかににげることの出来ない人々はギッシリ身を寄せあって空襲の去るのをまつよりしようがなかった。飛行機がようやく去つたのでやつの思いで暗渠から出てみるとすぐそばで、トラックが銃撃にあい、あたり一面荷物が散乱していた。仲吉のウシユマイ(老人の意味)と平良のンメー(老婆の意味)が死んでいた。年寄りでトラックから飛びおろることが出来ずにトラックに乗ったまままで死んだのだろう、かわいそうな老人の死でした。同行の人々は先を急ぐことしか頭になく、老人の家族をのこし先を急いだ。

白水の入口にある字登野城の避難場所の近くに来たとき銃撃にあったのだろうか。粟盛さんの馬一頭、鶏七、八羽が死んでいた。また近くでは、ロケット弾によって大人三、四名でかかえられるほどの大木が根こそぎ倒されていた。

こうして大川の避難場所についたのは、昼十二時ごろであった。やつとこのことで命びろいをし、おそろしい避難所への道のりであつ